
呉志英雄伝

赤いきつねとピンクのたぬき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呉志英雄伝

【Nコード】

N7648N

【作者名】

赤いきつねとピンクのためき

【あらすじ】

時は漢王朝末期。

荒廃した世で賊として生きてきた少年はとある女性たちと出会う。

それは少年の生き方そのものを大きく変える、非常に大きな出会い。

果たして生まれ変わった少年はこの世に何を見て、何をなすのだろうか。

この小説は真・恋姫？無双＋オリ主（最強）の二次小説です。
？ありがちな設定

？作者（厨二病末期患者）の自己満足

？比類なき駄文

その他諸々のマイナス要素によって構成されていますので、それでもいいよ！という心優しき方々はどうぞご覧くださいます。
読んだ感想やご意見を聞かせていただけましたら幸いです。

プロローグ〈赤髪の少年〉（前書き）

他の小説が上手く描けないのでむしゃくしゃしてやった。

後悔はしていない。

と、戯言はこれくらいにしておきましょう。

初めての方は初めまして。以前に何らかの作品を読んでいた
方はお久しぶりです。

赤いきつねとピンクのためきと申します。

本来はネギまを書くはずだったんですが、上記のとおりまるでうま
くいきません。

正直心が折れて投げだしたいです。

まあ息抜きということでこちらを更新していこうかなと思っており
ますので、気がむいたらお読みくださいませ〈――〉〈――〉

ブローグ赤髪の少年

中国荊州南部の長沙。

この一帯を治める女傑・孫堅は、左右に自らの配下である黄蓋、朱治を従えて賊の討伐に赴いていた。

「数は2000といったところか。賊にしてはよくまとまっている」

少し高台から敵を見下ろし、白い髪を風になびかせて言うのは黄蓋。その口ぶりからは少なからず、賊の集団を統率する人物への感嘆が見て取れた。その言葉に隣に控えていた燃えるような紅い髪を腰のあたりまで伸ばした妖艶な美女、朱治も頷いて肯定する。

「ええ、少なくとも今の皇帝勢力よりはマシな動きね」

朱治は吐き捨てるように言う。この大陸に匪賊が横行し始めてから数年が経過したが、漢王朝は未だにその動乱をおさめられずにいた。それはつまり漢王朝の権威と軍事力の失墜を示しており、それが匪賊の横行に拍車をかけていた。

「今はこうして各地で細々と賊がはびこっているけれど、そのうちこの大陸を巻き込んだ一斉蜂起が起こる。ならば我らはここで少しでもその災いの芽を摘み取るのみ」

「「応」」

孫堅の言葉に傍らにいた二人はそれぞれの得物を構える。それに呼応して、彼女らの軍勢も抜刀し戦闘態勢に入る。
・・・とそのときだった。

「申し上げます！」

今から攻め始めんとする孫堅軍の本陣に斥候が息を切らして駆け込んできた。彼が来た方角からは砂塵が舞っている。それを見て戦闘経験豊富な3人はすぐに状況を察する。

「別動隊じゃと!？」

背後からの突然の奇襲に部隊は混乱している。それと同時に敵本隊も動き始め、孫堅軍に挟撃を仕掛ける。

そして敵の別動隊は本陣目がけて真っ先に突撃を敢行している。普通の軍勢相手なら、この時点で賊の集団は勝ちを拾えていたのかも知れない。…そう、あくまでも『普通』の相手ならば…

賊の誤算はただ一つ。

孫堅らは場数を踏み、幾度の勝利をつかんできた猛者たちであること。

孫堅は黄蓋、朱治に指示を出し、すぐに軍勢を立て直し応戦を始め

る。そうならばやはり賊ごときでは正規兵と渡り合うのは不可能。
別動隊は瞬く間に殲滅され、2000いた本隊もあつという間に烈
火の如く侵攻する孫堅軍に呑み込まれた。
孫堅軍の誰もが自らの勝利を確信した。

「これで決まったわね」

朱治の言葉がこの場にいる者全ての心を代弁していた。しかしそんな中孫堅だけは気難しい顔をしたままだった。

「…堅殿？どうされた」

「ん？祭か…。どうにもまだ一波乱ありそうだな…」

「お得意の『勘』か？」

「…ああ」

孫堅が黄蓋を『祭』と呼んだのは、この大陸に真名という風習があるからだ。それは本人に認めた人物にしか呼ぶことを許されない神聖な名前。

それを勝手に口にすることは万死に値するほど大事なものである。

ちなみに朱治の真名は『焰』、孫堅の真名は『桃蓮』である。

さて、話を戻そう。

孫堅の勘だが、常人のソレとは一線を画している。いわゆる超直感というもので、その的中率は百発百中。

ゆえにこの軍の戦略において、孫堅の勘は到底無視できるものではないのだ。

その孫堅の勘が反応している。それはつまり実際にこのあと何かが起きるということ。

そのことを理解した黄蓋たちは否応なしに警戒度を引き上げる。すると敵を取り囲んでいた軍勢に動きがあったようだ。

そちらのほうに目を向ける3人。

そこには信じられない光景が浮かんでいた。

「人が宙に舞っている…!?!」

そう、孫堅軍の兵士たちが次々と空に舞い上がるのだ。無論そのまま浮いているということはあるわけもなく、そのまま地に向けて自由落下を開始する。

到底生き残れるとは思えないほどの高さまで舞い上がった体は「グシャッ」と嫌な音を立てて地面にたたきつけられる。

「…来たようだな」

にわかに信じられない光景に思わず呆然としている祭、焰とは対照的に桃蓮だけはその一連の出来事の元をその眼に見据えていた。

気がつけば、顔を古びた布で覆った小柄な人物が桃蓮たちの目の前に現れていた。

「孫堅殿でよろしいでしょうか？」

本来あるべき感情がこもっていない声。そのことに桃蓮たちは少しばかり肝を冷やす。
声からは性別がまるで判断付かない。

「いかにも。…お前は何者だ」

目の前の人物は異質すぎるのだ。戦のさなかだというのに、どうして一人でここまでたどり着けようか。

そして何よりもその人物が持つ、身長のはあるであろう大剣。それには肉片がこびりつき、鮮血が滴り落ちていた。

「名前なんかありません。ただ頭からの命令でここまで来ました」

それだけ言つとその人物は大剣を構える。

「では行きます」

相も変わらず感情のこもっていない声。
しかし布に覆われた顔から覗く視線には間違いなく殺意がこもっていた。

ダッ

周囲に聞こえるような大きな音を立てて、名の無い賊は大地を蹴り、一気に桃蓮に迫る。
だが桃蓮も大陸に名をとどろかせた武人である。自らの愛剣・南海霸王を抜き、迫りくる敵目がけて振り下ろす。

ドゴンッ

鋭い斬撃は敵を完全に捉えることはなかった。
わずかに敵の頭部を掠め、そして顔を覆っていた布がひらりと地面に落ちたくらいだ。
今まで見えなかったその賊の顔が日の光に照らし出される。

「「「っ!?!」」」

その素顔を見た周囲の兵士たちは、本来討つべき相手を討つことに思わず躊躇する。それもそうだろう。何故なら…

「子供…だと!?!」

相手は多く見積もっても精々12、3の少年だったから…

それを見た桃蓮にも少なからずの動揺が走る。そして少年はこの隙を逃そうとはしなかった。

「しまっ…!?!」

気づいた時にはすでに大剣の間合い、そして既に動作に入っていた。全身を使い、遠心力を乗せた大剣が無防備な桃蓮の横っ腹に唸りを上げて襲いかかる。

(やられた!)

そう思い、来るべき激痛とそして死の苦痛に備え、桃蓮は歯を食いしほる。

だが、その激痛も苦痛もいつまで経っても来ることはなかった。

「やれやれ、儼としたことが想定外のことだ。呆気にとられるとは…」

「全くね…まだまだ精進が足りないみたい」

声の方を見てみると弓を構えている祭と焰が確認出来た。

そして次に下に視線を落とすと、そこには矢じりが潰された矢と、脇腹を押えながら意識を手放した少年。

「祭、焰。手間をかけさせたな。すまない」

「別にいいのよ。…ところでその坊やはどうする？」

桃蓮の謝罪を意に介することなく、焰は倒れている少年を顎でさした。

「…こいつには少し聞きたいことができた。事と次第によっては…」

そう言つて、再び桃蓮は足もとの少年を見やる。

覆っていた布からはみ出た少年の赤い髪が大陸を抜きぬける春風にそよいでいた。

プロローグ―赤髪の少年―（後書き）

プロローグ？は終了です。

次回でプロローグが終わって、そして呉の面子との出会いを果たしていくことになるかと思っています。

今回もお付き合いくださいましてありがとうございます！（
>

プロローグ〈名前と母親と絆〉（前書き）

連日の投稿です。

こつちを更新する余裕があるなら、早いところ『恋姫たちと心優しき死神』の更新しろよ、というツッコミが聞こえてきそうですが、あえて聞き流します。

まあ理由は・・・察してください。

ではプロローグ？をお楽しみくださいませく（ー）（ ）>

ブローグ／名前と母親と絆／

「名は何だ？」

「先ほども申した通りありません」

「年は？」

「10らしいです。頭の言ってたことですが」

「何故あの賊共とおったのだ？」

「分かりません。物心がついた頃には既に」

桃蓮、焰、祭から矢継ぎ早に繰り出される質問にすらすらと答えていくのは、先ほど捕えられた少年である。

ちなみに一行はすでに桃蓮の居城である長沙まで戻ってきている。

そして目を覚ました少年の尋問に取り掛かっているのだ。

とは言ってもどれもはっきりしない答えばかり。

三人は思わず頭を抱える。

「…そう言えば…」

そんな三人の様子を見てかどうかは分からないが、少年は口を開く。

「名前かどうかは知りませんが、頭たちにはよく『人形』と呼ばれていました」

少年が何気なく言い放った一言に三人は絶句する。

少年の言が正しければ、少なくとも人間としては扱われていなかったであろう。目の前の年端のいかない子供がそのような目にあっていることがたまらなくつらかった。

一方、その本人は先ほどからずっと顔に笑みを張りつかせたままだ。その表情でこのようなことを話されているのがまた不気味でもあった。

「…どうして笑っているのか、ですか？」

「「「っ！？」」」

心の内を見事に言い当てられ、桃蓮たちは思わず驚きを表に出してしまう。しかし少年はそんな様子に構うことなく言葉を続ける。

「何故かはわからないんですけど、こうやって笑っていると頭たちに殴られないですむんです。だから…」

話す少年の目にはわずかながらも悲しみの感情が宿っている。

「そうか…」

今の桃蓮にはそうとしか言えなかった。

もしかしたらこの子は賊に殺された子供たちよりもよっぽどつらい目にあつてきたのかも知れない。いや、ほぼ間違いなくそうだろう。それを考えると「今の自分たちにはかけてやれる言葉がないのではないか……」という思考にたどりつく。

気まずい沈黙が周辺を支配する。

ガシッ

「ひっ!？」

沈黙を破ったのは少年が発したかすかな悲鳴。

「怯えないの。…私たちはあなたの味方よ」

何と焰が少年の頭をかき抱いたのだ。少年は突然のことに驚き、そして戦場で見せた姿とは正反対のおびえた様子で体を恐怖に震わせ

ていた。

「大丈夫」

焰は今一度少年に言い聞かせる。

少しだけ少年の震えが弱まる。すると焰は少年の頭をゆっくりといとおしげに撫でる。

「…今まで辛かったでしょう。色々なことをされて、生き延びるために人も感情も殺して…。でももう我慢しなくていいの。それに怯えることもないわ」

少年を気遣い、そしていつくしむ声がその場に溶けて消えていく。数拍の間を開けた後、黙ってされるがままになっていた少年がようやく口を開く。

「…ホント？」

それは先ほどまで淡々と質問に答えていた無感情な声ではなく、年相応の怯えに満ちた声。

「ええ」

そんな声を聞いて、焰は少年の心が壊れてしまう前に何とか救い出すことが出来たのだ、と根拠のない、しかし間違っていない感触を得る。

焰の腕の中では小さな嗚咽を漏らし、涙を流す少年の姿。

焰は泣きやむまで、少年の頭を優しく撫で続けた。

「落ち着いたか？」

泣くだけ泣き、少年は少しだけすっきりした顔をのぞかせる。
そして桃蓮はその様子を見て話を元に戻す。

「お前の処遇についてだが…」

そう言った瞬間、再び少年の体が強張る。少年は既に孫堅軍の兵士を何人も葬り去っているのだ。処遇と聞いて楽観的になれない程度の常識はすでに持ち合わせている。

「安心しろ。別に殺そうってわけじゃない。ただその前に聞きたいことがもう少しだけある」

「…何ですか？」

「あの背後からの奇襲…発案したのはお前か？」

「何！？このような子供がそんな芸当を出来るわけないっ！」

桃蓮の問いに祭がありえないと言った風に応える。
しかし桃蓮はじっと少年の顔を見つめている。

「…そうです」

「やはりそうか」

少年は沈黙を守っていたが、桃蓮のすさまじいほどの無言の圧力に遂には屈し、そして肯定の返事を返す。少年自身、この答えの持つ

意味を分らないわけではない。

奇襲をかけることによって、少なくとも真正面からぶつかり合う以上の損害を孫堅軍に与えたのだ。そんな者の行く末など想像に難くない。

だからこそ少年は俯き、ギュツと目を閉じ、そして拳を強く握り締めて桃蓮の言葉を待った。

「この年でこれほどの才。…失うには惜しすぎる」

しかし桃蓮の口から出た言葉は少年に対する讃辞。

「どうだ？私に仕える気はないか？」

「…ふえ？」

そして続いて出た言葉もまた少年には想定外の言葉。
あまりの急展開に少年は言葉を失う。

「そうだな。親もいない、そして名前もない、それでは余りにも不憫だからな。焰、コイツを引き取ってやれ」

「ええ、そのつもりよ」

そんな少年に関係なく、話はほとんど順調に決まっていく。少年

はただ呆然とその様子を眺めていることしかできなかった。

「というわけでよろしくな、童」

呆けていると、突然頭の上に手を乗せられる。

少年振り向いた先には同じく急展開に取り残された祭の姿があった。祭は少年の頭を焰とは逆に乱暴に撫でつける。

「我が名は黄蓋、字は公覆。…まあこれからは同志じゃ。真名の祭と呼ぶことを許そう」

「私は孫堅文台。桃蓮と呼べ。そしてこっちが朱治、字は君理だ」

「自己紹介くらいさせなさいよ。真名は焰よ。これからはあなたの母親になるから存分に甘えなさい」

あつという間に自己紹介を済ませる三人に少年は返す言葉を探すが見当たらない。

何せ少年には名前などないのだから。

そんな少年の心中を察したのか、焰は自らの考えていたことを言葉にする。

「それでね、あなたの名前を考えたのだけれど…」

その言葉に少年は敏感な反応を示す。

「姓は朱、名は才、字は君業、そして真名は…そうね、偉大なる長江をなぞらえて『江』でどうかしら？」

「…」

何かを言おうと必死に口を動かす少年。

しかしどうしても出せない。代わりに嗚咽が漏れだし、そして頬を一筋の涙が伝う。

「き、気に入らなかったかしら？」

焰は焦って、泣きだした少年を慰めようとする。

それに対し、少年はフルフルと首を横に振って嗚咽まじりの声で返す。

「朱才君業…名前を、ありがとう…母様」

名前もなく、人形として扱われてきた少年にとって、名前というのは非常に大きなものだった。憧れ、そして嫉妬の的。今まで欲しくて欲しくて、でもどうせ手に入らないと思っていたものがようやく手に入ったのだ。その感動は計り知れない。

「…そう、よかったわ」

そしてその真意を感じ取った焰は今一度少年を胸に抱いて一言。

「これからよろしくね。江」

とだけつぶやいた。

プロローグ〈名前と母親と絆〉（後書き）

これにてプロローグは終了。

そして次回、少しだけ時間が飛んで小霸王様たちとの出会いとなります。

今回もお付き合いくださいましてありがとうございました。――
>

第1話、姫2人、（前書き）

小霸王と美周郎の登場です。

とは言ってもキャラが少し（大分？）異なるかもしれませんが、それはまあオリジナル要素ということでお見逃しください。

あとまだ蓮華様は出てきません。

では第1話をお楽しみくださいませく（ー）>

第1話　姫2人

江が朱家に引き取られてから3年の月日が流れた。

最初のうちは義母である焰にしか心を開いていなかったが、3年という時間がその問題を解決してくれた。

この3年間、江は主に内政・軍略を学んでいた。それは江の武の実力が既に桃蓮と同等だったこともあるが、第一の目的は江を戦場から遠ざけることであった。

江は育ちの環境のせいもあって、幼いころから人を殺め続けてきた。当時は感情を押し殺すことで何とか心の均衡を保っていたが、ようやく感情が表に出始めた今になって再び戦場に身を投じさせてしまふと、今度こそ心が壊れてしまふかもしれない。

この乱世、いずれは再び戦場に赴くとしても、今は知識に磨きをかけ、そして心を鍛えるのが上策と判断されたのだ。

結果としてこの教育方針は良い方向へと転んだ。

賊という縛られない環境で育ったが故か、江は内政においても軍略においても他にはない柔軟な発想を持っていた。

無論、まだ経験がないので理想に偏ったところもあったが、それを現実的な方策に改善することも十分可能なものだった。

保護されてから2年経った12歳の時に仕事に就き、瞬く間に自らの才を開花させ、また江の武術の才を知っている者は桃蓮、祭、焰の3人だけということもあり、周りからはいつしか江は文官として知られるようになっていた。

そんなある日江は桃蓮の呼び出しを受け、宮城へと出向いていた。そこには2人の少女を連れた桃蓮が立っていた。桃蓮は江の姿を確認すると口を開く。

「よく来たな。今日はお前に引き合わせたい奴がいる」

そういつて2人の少女を前に押し出す。

一方は紫がかった桃色の髪をした桃蓮の面影を持つ少女、そしてもう一方は艶のある真っ黒で長い髪を腰の辺りまで伸ばした少女。

「ほら、二人とも自己紹介しな」

桃蓮が2人に促すと、まずは桃蓮似の少女が声を上げた。

「孫策、字は伯符よ。朱才、あなたのことは母様から聞いてるわ。よろしく」

屈託のない年相応の笑顔を向けて、江に向かって手を差し出す。江はその手を握り握手を交わす。

「姓は周、名は瑜、字は公瑾だ。よろしく頼む」

それに呼応して横にいた黒髪の少女も自己紹介を済ませる。しかしこちらの少女は孫策とは対照的で、見定めるかのようにじつと江の眼を見つめている。そこから感じ取れるのは警戒心というよ

りも好奇心が主だった。

「よろしく願いますね。周瑜殿」

そんな周瑜に江は柔らかな笑顔で手を差し出す。

その行為に周瑜ははっとすると顔を真っ赤にして俯きながら、江の手を取る。

「…すまない。つい興味が湧いてしまつて」

「お気になさらないください。好奇の視線を向けられるのは慣れていますので」

クスクスと笑い声を漏らし、表情を崩すことなく若干意気消沈気味の周瑜に應對する江。

桃蓮は一連の出来事を見てしみじみと感慨にふけていた。

（あの作られた笑顔とは全く違う、本当の笑顔…。コイツもこんな表情をするようになったのか…………）

賊からは人形と呼ばれ、桃蓮たちに保護された後もしくは作り笑顔に終始していた江が、その後の人付き合いによって感情を取り戻したことに心から安堵していた。

(…しかしコイツの笑顔は本当に『アイツ』に似ているな…)

脳裏に浮かぶのは友の姿。

しかし彼の者はすでにこの世にはいない。

「母様！」

「ん？」

不意に大きな声が響き、桃蓮の思考を中断させる。
声のした方向に目をやるとそこには頬を膨らませた自身の娘が立っていた。

「どうした、雪蓮」

「江と城を回りたいて言ったのに、母様ったら何も言ってくれないんだもの」

「ああ、それはすまない。別に城を回るくらいなら構わないぞ。…それより、もう真名を交換したのか」

雪蓮が江のことを真名で呼んでいたことに気づく桃蓮。

「だって母様が紹介したほどの人物だし、それに実際に会ってみても信頼できると思ったから。冥琳だって真名を許したわよ？」

「…つまりは勘か？」

「ええ」

「お前はつくづく私の娘だよ」

桃蓮はやれやれと首を横に振る。

自身の勘が娘に脈々と受け継がれていることに少しばかり複雑な感情を抱く。桃蓮にとって勘は信用できるが、信用し過ぎてもいけないもの。

以前にそれで命の危機に直面したのだ。娘には二の轍を踏んでもらいたくはない。

「母様の了解も得たし、行くわよ。江」

母の心配をよそに雪蓮は嬉々として江の手を引っ張り、部屋の外へと駆け出す。

冥琳は完全にその流れに乗り遅れて、しばらくして大声で雪蓮の名を呼びながら追いかけていった。

「…それにしてもうちの娘はともかく、冥琳までもがこつも早く真

名を許すとはな」

江には人を引き付ける何かが備わっている。

それに加えて知謀の才を有し、武に至っては自分と同等。

「馬鹿娘と同年だっていうのに……きっと天に愛されてるのだろうな」

いや

「今までの不幸を乗り越えるために与えたのかも知れない」

桃蓮にしては、らしくない天命という考え。

しかしそれほどまでに江の存在は異常だった。

「いずれにせよ、江は必ず呉の大黒柱となるだろう。しっかり育ててやらねばな」

そして視線を、中庭をかけていく3人に移す。

そこにいる江は先ほどと同様に屈託のない笑顔をしていた。

宮城内を回っていた江たち一行。

江にとつて、毎日というわけではないにしても仕事でよく来る宮城だ。熟知とはいかないまでも、簡単な構造はすでに頭の中に書き込まれている。

しかしそこはやはり13歳の子供。

同い年の娘と回れば、それだけで見慣れた廊下もいつもとは違った風に見えてしまう。雪蓮は終始騒ぎ、冥琳はそれをたしなめ、そして江はその光景を傍から笑って見ていた。

そして一通り回りきった江たちは最後に訓練場に来ていた。

「ここでいつも兵の訓練、そして武将自身の鍛錬をやっている」

冥琳は簡潔に、しかし要点をきちんと詰め込んだ説明を江にする。軍務から遠ざけられていた江は初めて見る訓練場に興味津々のようだ。

「さてと…。江」

雪蓮の声が聞こえ、そちらのほうを振りむこうとする。しかし少し不穏な空気を感じ取った江はピタッと止まる。

「…そんな殺気を撒き散らしてどうしたのですか？雪蓮」

「母様から聞いたのよ。『お前と同じ年で自分と同等の強さを持つ者がいる』ってね」

「…それは興味深いですね」

江はしれっと受け流す。

「とばけないで。気になって母様にお酒を飲ませ続けたら、あっさり言ってくれたわ。『3年前に朱家の養子になった』。それってあなたよね？江」

（…桃蓮様、お恨み申し上げます…）

どうやら全て知られているようだ。
江は深い溜息をつく。

「それで、手合わせをしろと?」

「ええ」

手合わせという言葉に雪蓮は満面の笑みでこたえる。
しかし殺気が抑えられずに漏れ出しているので、その笑みも大層不
気味へと変貌している。

江は冥琳の方に目をやるが、冥琳は冥琳で、江と雪蓮の手合わせに
関心を抱いている様子で止めてくれる気配は全くない。

「…いいでしょう」

「やった」はい、得物はこれでいいわよね?」

「準備がよろしいことで…」

江の承諾を得るや否や、雪蓮はいつの間にか持っていた剣を江に手
渡す。

そして訓練場の真ん中へと歩を進める。

「冥琳、開始を合図をよろしくね」

「承知した」

訓練場の真ん中で雪蓮と江が対峙する。

冥琳は手をかざすと、大きく息を吸い込みその手を振り下ろした。

「始め！」

開始の合図と共に攻撃を仕掛けたのは雪蓮。

大きく振りかぶった剣を江目がけて全力で振り下ろす。

江がまるで動きを見せないが、雪蓮は構うことなく動作を続ける

「はあああああ！！！！」

ガキンッ

振り下ろされた剣が江の身に届かずに停止する。

江は雪蓮の全力の攻撃を右手に持った剣一本で受け止めたのだ。
そのことに少なからず動揺する雪蓮。

「戦いの最中に心の隙を見せてはいけませんよ」

いつの間にか雪蓮の背後に回り込んでいた江はそう言つと雪蓮の後頭部を軽く小突く。

「っ！バカにしないで！」

この行為は雪蓮の武に対する誇りを傷つける。
その眼に怒りの感情を湛えて、後ろに立つ江に横薙ぎの斬撃を放つ。
しかし…

「消えた！？」

その攻撃はむなく空を切ることとなる。

「安い挑発に乗るのもよくないですね」

誰もいないのに江の声が聞こえる。

その声が足元から聞こえることに雪蓮が気づくには時間が足りなかった。

声が聞こえた次の瞬間、雪蓮の視線は空に向いていた。

ドサッ

音を立てて、地面に仰向きに倒れこむ雪蓮。

そこでようやく自分がきれいに足払いを受けて、地に倒れこんでいることに気づいた。

ザク

そしてまたその次の瞬間、自分の頬のすぐ横には剣が突き立てられていた。

刃が当たったのか、雪蓮の頬には一筋の傷が出来、そこから血がにじむ。

「これで満足していただけましたか？」

見上げれば、そこには優しい表情を浮かべる江の姿。

陽の光に照らされたその笑顔に雪蓮は少しの間見惚れていた。

「…雪蓮？」

「…あゝあ、私の負けよ。完敗」

何故か負けたというのに、雪蓮は妙にすがすがしい気分だった。

「それでは今日はこれにて失礼いたします」

陽の光が傾き、西の空を茜色に染め上げている時分、江は孫家の親子と冥琳に別れを告げて、帰途についた。
江が帰った後の宮城で…

「むうゝ泊まっていたっていいじゃない」

と駄々を捏ねているのは雪蓮。
そんな愛娘の様子に思わず笑みをこぼすのは桃蓮。

「江には朱家という帰るべき家があるのだ。……………それとも何か？
アイツに惚れでもしたのか？」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべながら、そんなことを言う。

「なっ、別にそう言う意味じゃないわよ！」

「ほお…手合わせの後、あんなにべったりしてたのに私たちが気付かないとでも思ったのか？」

雪蓮の否定の言葉に、すぐ冥琳が追撃をかける。
雪蓮の顔は徐々に真っ赤に染め上がっていく。そして遂には…

「ああ、惚れましたとも！どう、これで満足！？」

開き直りである。

その様子に桃蓮の笑みは苦笑に変わる。

「焰はいつも江にべったりし、祭は弓術の鍛錬にかこつけて朱家に

いりびたり、そして拳句の果てにはうちのバカ娘もか…江の奴は天然の女誑しになりそうだな」

だが桃蓮にそれを否定する気はない。

それも人に好かれるということなのだから。

向こうでは雪蓮が冥琳にからかわれ、涙目になって抵抗を続けている。

「案外雪蓮と結びつけるのも悪くはないかもしれないな」

そう呟いた。

第1話〜姫2人〜（後書き）

この小説を書き始めて思ったのですが、PVの増え方が全然違いますね。

今思えば、恋姬たちと心優しき死神でPV1万越えを連発していた日々は異常だったんですね。

まあ日に2、3回更新していたら当然ですが・・・

この小説でもそうなるように頑張っていくつもりです。

> 今回もお付き合いくださいましてありがとうございます！（――）

第2話〜討伐と出会い〜（前書き）

今回は長めです。

ところで、少し関係ない話をさせていただきますが・・・

評価 p t のことに関してです。

私としては、お世辞にも高い評価をもらえるとは思ってないので、ポイント自体はそれを見て一喜一憂する程度にとどめております。

しかし 1 p t をつけられると、どうしてもどのような経緯でそうなったのかが気になります。

低い評価が付くの中には、相応の理由があるのですから個人的にはそれを指摘していただきたいのです。

そうしていただければ、こちらにも欠点を修正できます。

出来ましたら、ただ評価をつけるだけつけて何も指摘しない、というのを避けてほしいかな、と。

勝手なことを抜かしているとは思いますが、そう感じたので書かせていただきました。

長々と申し訳ございません。

第2話をお楽しみくださいませく（ー）（ー）>

第2話　討伐と出会い

「江賊の討伐、ですか？」

晴天が続く冬の長沙の宮城で、江は主である桃蓮に声をかけられた。内容は江賊の討伐に同行してほしいというものだった。この時期には既に桃蓮の勢力は江東にまで及んでいた。もともと長沙の太守に赴任する前は江東に本拠をおいていたので、当たり前といってしまうえばそれまでなのだが。

「そうだ。今回は蓮華の初陣となる。お前にその補佐をしてほしいのだ」

「分かりました」

桃蓮の『孫権の補佐をしてほしい』という要請を特に考え込む様子も見せずに快諾する。

「出発は明日の朝だ。それまでに準備を済ませておけ」

それだけ言い残すと、桃蓮は踵を返し、自らの部屋へと歩き去っていった。

江はそれを見届けると早速戦の準備に取り掛かるべく、自らの家・

朱家へと向かった。

自室へ戻った桃蓮はフウと息をつき、椅子に腰掛ける。そして机の上に広げられた書簡を手に取り目を通す。

送り主は焔、そして内容はその義理の息子である江のことであつた。

一通り目を通し、桃蓮は書簡を元あつた机の上に置く。

「喜怒哀楽をあらわすことが出来るようになり、心も幾分か強くなつた、か…」

軽く眼を瞑つて、座っていた椅子の背もたれに体を預ける。

「江は軍事においても呉の主力足り得る実力を既に持っている。そろそろ戦に出しておかないと、経験も周囲からの信頼も得られないだろう」

今回の江の参戦における最大の目的、それは孫権の補佐などという理由ではない。補佐には焰や冥琳のような後方支援に秀でた武将を置くのが好ましい。

本当の目的は江が今後の戦力になり得るか、判断することだった。いや、正確に言えば、今後熾烈を極めることになるであろう乱世を生き抜くことが出来るほどの心の強さを備えたかを確かめると言う方がいいたろう。

だが

(…本当に大丈夫なのだろうか…。)

不安が桃蓮の頭の中をよぎる。

確かに保護してから5年、特に雪蓮たちと引き合わせてからの2年で江は様々な感情を取り戻すことに成功した。

だがそれはあくまでも長沙の城内での話。

この5年間で戦いを経験したことはない。

(もしかしたらまたあの『人形』のような状態に戻ってしまうかもしれない)

桃蓮が抱く危惧は江の内面にあった。

江は優しすぎるのだ。限りなく、まるで聖人のように。

そしてその優しさは味方だけでなく、敵にまで向けられてしまう。

戦場においてはこの優しさはただの『甘さ』に変わる。

そんな武将が果たして戦場で何の役に立つだろうか？いや、敵の得にはなれど、味方には損害を被る原因

にかなり得ない。

だからといって出会った時のようになられるのもよろしくない。あのような状態ではいずれ味方に見放されてしまう。

（焰の報告を、そして成長した江を信じよう）

しかし出陣を伝えてしまった以上、もう後戻りは出来ない。それならばこのような思考も無意味である。

桃蓮に出来ることは、次代の大黒柱になるであろう江を信じ、手助けをすることだけだった。

江賊を討伐する当日、長江上の湿った空気が冬の朝の空気に冷やされて霧が立ち込めていた。

現在、江たちは長沙を真北に進んだ洞庭湖と長江の合流地点にいた。さて、出陣の折に孫権とあいさつを交わしたのだがその時の対応は冷やかなものだった。孫権といい、その傍に控えている副官といい、いささか江を軽視していた。

「何故戦の経験のない文官風情が孫権様の補佐なのだ」

とはその副官の言である。

どうやらこの部隊の上層部は江の実力を知らない者がほとんどを占めているようだ。

しかし基本的に事を荒立てることを好まない江は一切の反論をせず、わずかな直属の部下に大剣を持たせて孫権の横にたたずんでいた。

そして現在に至るわけだが、江の意識はすでに敵へと注がれていた。報告によれば、敵の数は800。率いる者の名前は甘寧。この辺りでは名の通っている猛者だ。

故にこちらも南から孫権率いる囀の部隊で敵の意識を集中させ、その間に長江下流に潜んでいる桃蓮率いる本隊が横撃を仕掛けるという手はずになっていた。

両方とも配置につき、あとは霧が晴れ、孫権部隊の始動を待つのみとなっている。しかしここで事態は思わぬ方向へと流れていく。

「この霧にまぎれて、敵に奇襲を仕掛けましょう！恐らく敵はこちらの存在に気付いておりません」

孫権のそばに控えていた副官は孫権にそんなことを進言した。
こんな馬鹿げた提案が通るわけがない。江はそう思い込んでいた。

「・・・確かに一理あるな。全軍に通達せよ」

しかし、そんな思い込みを孫権の一言が粉々に打ち砕く。
そのことに呆気にとられた江はすぐさま意識を引き戻し、孫権に進言する。

「奇襲には反対です。そもそも敵は長江を本拠地とする者たち。霧が出ることも承知していたでしょう。それに甘寧は名の通った賊。兵法をわずかでも知るものであるならば霧にまぎれて奇襲に来ることなど容易に予測できます」

「戦を知らない文官殿がよくもまあそこまで言い切れますな。戦とは机上の論理が通用しない。ましてや敵は賊。こちらの動きなど読めることはありますまい」

江の意見を真つ向から否定する副官。そして様子を見る限り、孫権の意見もどうやら副官側のようだ。

結局江の反対も実らず、孫権は部隊に出撃の命令を下し、前線の兵士は敵がいると目される河岸の根城に攻撃を仕掛けた。

孫権部隊が突撃を開始してから間もなく、桃蓮の下にそのことを告げる伝令がやってきた。

報告を聞いた桃蓮以下数名の将たちは深い溜息をついた。

「やはり動いてしまったか…」

「やはり、じゃないわよ。だからアイツを副官につけるのに反対したのに」

アイツとはもちろん孫権に攻撃を進言した副官である。

彼は武勇は人より少し秀でてはいるが知に關してはからっきし、いわゆる猪武者というやつだった。

「そのために江をつけたのだから」

「よく言う。あ奴らが江の実力を知らないことなど分かっていたじやろうに」

「全くよ。…そろそろ本音を明かしたらどう？」

桃蓮の言葉に祭、焰が追い打ちをかける。

そしてとどめは冥琳が放った。

「あの男をダシにして、江の実力を我が軍に示すのが目的、ですね？」

「…半分正解、といったところか」

「ではもう半分は？」

自分の答えが割といわれて、内心驚きを感じている冥琳が残りの半分について桃蓮に問う。

そんな冥琳に桃蓮は逆に質問を返した。

「お前は蓮華をどう見る」

「どう、とは？」

「私や雪蓮に比べて、という意味だ」

ああ、と冥琳は顎に手を当て、少し考えたとすぐに口を開いた。

「はつきり言ってしまうえば、軍事においては足もとにも及ばないでしょう」

「ほお、『軍事においては』か」

「はい、あくまでも軍事に限って言えばそうなります。しかし私が思うに蓮華様の真価はそこではないと思うのです。おそらく雪蓮、そして桃蓮様よりも『王』としての資質があるかと」

「本人を目の前によく言ってくれる」

冥琳の率直な言葉に苦笑を浮かべる桃蓮。

しかし冥琳の見立ては桃蓮が考えていたものと同じだったために反論もとがめもしなかった。

「まあそういうことだ。つまりゆくゆくは蓮華がこの国をまとめることになる。しかしその時には隣で支えてくれる誰かが必要なのだ」

「それでこの戦をきつかけに蓮華と江を仲良くさせようってわけ？」

雪蓮の言葉に桃蓮は首肯を以て応える。

その行為に雪蓮は頬をふくらませ、口をとがらせる。

「ちえ、それなら私にもきつかけをくれればいいのにー」

「お前はきつかけなんざなくとも勝手に近づくだろっが」

戦のさなかだと言うのに軽口をたたき合う2人。

そんな2人に周囲の将、そして兵たちはため息をもらす。軽口が言い争いに発展し、双方が武器を構えるまでに至ったので、焰は桃蓮の代わりに兵たちに指示を出した。

「別動隊が危機に陥ったらすぐに突っ込めるようにしておきなさい」

そう告げて、現在戦っているであろう息子のいる方角へと目を向けた。

辺りはまだまだ濃い霧に覆われていた。

一方その頃敵の根城へと攻撃を仕掛けた孫権部隊は困惑していた。
何せ敵の根城には人っ子一人いなかったのだから。

「何！？何故いないのだ！」

副官は怒り狂い、報告をもたらした兵を怒鳴りつける。
傍で聞いていた江は「奇襲が読まれていたからに決まっている」と
呆れながら心の中でこぼした。

「ええい、探せ！探し出して攻撃を仕掛けるのだ！」

声を荒げ、敵を搜索するように指示を出す副官。

「…はあ、もう無駄ですよ。恐らくは…」

敵の攻撃が来る。

そう続けようとした江の言葉をさえぎったのは味方の焦燥の声だった。

「申し上げます！背後に敵が出現！どうやら長江から洞庭湖に入り、我が軍の背後に回り込んだ模様です！」

この情報にあたふたと慌てふためく副官。

そして慌てる上司を見て、配下の兵たちも動揺し始める。部隊は最早烏合の衆という言葉が当てはまるまでになっていた。しかしそんな雰囲気は一変した。

「静まれ！」

大音量の叱責が部隊内に響き渡り、突然の声には兵たちはシーンと静まり返る。

声を上げたのは江だった。

「ただか敵が背後に現れた程度で隊列を乱すな！それでも孫呉の兵か！」

静寂が支配したその場に江の声のみが響く。

「今から部隊を2手に分ける！それぞれ敵の突撃を左右に分かれて
かわし、横撃せよ！その他の指示はその都度伝える！以上だ！」

その言葉でようやく我にかえった兵たちはすぐに隊列を組み直し、
来る敵の攻撃に備えた。

そんなとき江に声をかけてくる者がいた。
副官であつた。

「き、貴様、孫権様の許しも得ずに勝手に兵を動かしたな。これは
重罪だぞ！」

「ならば作戦を無視して、攻撃を仕掛けた貴方がたも軍律違反です
ね」

副官のいちゃもんに、迷うことなく反論をする江。

その言葉に副官は言葉を失う。

「それにこのままでは孫権様のお命すら危ない状況。そこで指示を出さない方がよほど重罪と思われますが？」

そう言う江の眼には嘲りの色が灯っていた。

と、江の視線が別の方向へと向けられる。副官もそれにつられてそちらの方向を見ると、そこにはちょうど孫権と同じくらいの年の女子が立っていた。

「だ、誰だ！」

突然の来訪者に再びうろたえる副官。

しかし、江のほうは驚きもせず、ただその少女を見つめていた。

「…なるほど、いい眼をしています。貴女が甘寧ですね」

「……………」

返ってくるのは無言。

そしてその少女は武器を構えると、副官たちの視界から霞のように消え去った。

「っ！？」

次に副官がその視界に彼女を捉えた時には既に孫権に得物を振りかざしていた。

敵に背後をとられてからずっと空気と化していた孫権は、突然のことに状況を飲み込めないのか、ただ呆然と突っ立っていただけだった。

「孫権様！」

副官が声を張り上げるが、敵の少女は得物を孫権に振り下ろしていた。

もうダメだ。

副官が内心でそんなことをつぶやいたとき、本来聞こえるはずのない鉄と鉄のぶつかり合う音が聞こえた。

「敵を前に心の隙を見せるは悪しです。よく覚えておいてください」

そこには先ほどまで蔑んでいた男の姿があった。

その男は微笑みながら、孫権に声をかけるとゆっくりと少女の方に向けて目を向けた。

「それにしても名乗りもしないとは…まあ私も人のことは言えませんがね」

そう言うと江は大剣を力任せに振り切り、鎬を削っていた少女を吹き飛ばす。宙で一回転し、器用に着地した彼女の表情は明らかに驚愕に満ちていた。

「我が名は朱君業。お手合わせ願いましょうか。江賊頭領、甘興霸」

「…いいだろう。我が鈴の音は黄泉路に誘う道標と心得よ」

チリンと鈴の音が鳴り響く。

すると先ほどと同様に甘寧の姿が掻き消える。しかし江が慌てる様子はまるでない。

ガキッ

「なっ!？」

思わず驚きの声を漏らしてしまう甘寧。

彼女の全身全霊を込めた急所の一撃は、左手に持たれた江の大剣に

よっていとも簡単に防がれたのだ。

「圧倒的な速度で敵の急所を狙い、一撃で仕留める。その闘い方は戦場において重要なことです。…しかし」

江はスツと左手の力を抜く。

すると今まで押し負けまいと得物に力を込めていた甘寧の体が支えを失い、前のめりになる。その隙は致命的なものだった。

江の手刀が甘寧の右腕に放たれ、握られていた得物がカランと乾いた音を立てて地面に落ちる。

そのまま江は甘寧の服の襟をつかむと片手で地面にたたきつける。

「がはっ！」

すさまじい衝撃をその小さな体に受けた甘寧は息を漏らす。

そして気づけば、首筋に冷たいものが押し当てられている。ゆっくり眼を開け、確認してみれば案の定大剣であった。

「速度を得るためには防具は軽装、そして攻撃も軽いものとなってしまふ。防がれたときのことを考えておく必要がありますね」

敵である甘寧につこりとほほ笑みかける江。

甘寧は不覚にもその笑顔を見て頬を赤く染め上げる。

しかし江はそんな様子に気づかず宣言した。

「敵の首領・甘寧、この朱君業が生け捕った！」

そしてこれが戦の終わりを告げる合図となった。

「どうかお願いいたします」

周囲にいる人間は、将兵問わず皆呆然としている。それは捕えられた賊たちにも言えることだった。

今自分たちの目の前で繰り広げられている光景はそれほどに珍しいものだったのだ。

「俸給などいりません。どんな命令でもお引き受けいたします。どうか配下にお加えください」

あの鈴の甘寧が頭を下げた嘆願しているのだから。
しかもその相手が

「頭を上げてください。私は文台様の部下ですから、私の一存では何も言えないのです」

江である。

主である桃蓮を差し置いての嘆願に江は驚き、周囲は凍りつく。そんな中ただ一人、桃蓮だけがニヤニヤといやらしい笑みをこぼしていた。

「江の思うとおりになるといい」

「なっ!？」

予想外の事態に江には珍しい驚きの声が漏れる。

江は腕組みをし、しばらく考えたのち何かひらめいたような表情で口を開く。

「そうですね。孫権様に仕え、そしてよく支えることが出来たのであれば願いをかなえましょう」

「…わかりました。必ずや遂行いたしましょう」

江が提示した条件に甘寧は渋々了承の意を示す。

ちなみにこのことに関して孫権は何も言わない。さきほど桃蓮からこつぴどく叱られたこともあるが、自らの命を救ってくれた江に対して文句はいえないのだ。

というよりも、今は江に憧れのものを見るような眼差しを送っている。

「では甘寧の件はこれにて終了だな。城に戻ろう」

桃蓮の言葉によって軍は撤退を開始した。

その道中でのことだった。

「命を救ってくれたことに感謝する」

「そ、孫権様？」

「『蓮華』と。そう呼んでほしい。それに今は共に母様に仕える身だ。呼び捨てで構わない」

突然孫権が江に話しかけたと思ったら真名を預けたのだ。

桃蓮の説教がそれほどにきいたのかと江は少し身震いをする。

「ではそう呼ばせて頂きます。私のことは江と呼んでください。よろしく願いますね、蓮華」

「あ、ああ、よろしく頼む」

江と蓮華は握手を交わす。

その後、そこに傍で見ている甘寧も参戦し、結局甘寧の真名である『思春』を呼ぶことを許されたのは余談である。

ある程度打ち解け、3人でしばらく雑談を続けていると後ろから焰が近づいてきた。

「母様？どうかしたのですか？」

「少し付き合いなさい」

江が用件を聞くと、焰は言葉少なに答える。いつもと違った様子に江は余計な詮索をせず、あとをついて行った。2人は行軍中の部隊から離れ、馬を走らせた。

「…それで何か？」

「近くまで来たからね。墓参りよ」

寂しげな表情を浮かべた焰はただただ前を見据えていた。

第2話〜討伐と出会い〜（後書き）

思春が仲間になるところまででした。

何か蓮華が嫌な奴になってましたね。

まあこれからどんどんイメージ回復していくことにしましょう。

今回もお付き合いくださいますありがとうございます！（
>

第3話『母様』と『母上』（前書き）

自分の構成力の無さに絶望した。

誰か介錯を頼む。

第3話『母様』と『母上』

「墓参り…もしや」

江の問いを聞き終える前に、焰は一度だけ軽く頷く。

「施家に嫁いだ私の姉様のね」

「そう、ですか…」

それを聞くと江は暗い顔で押し黙らざるをえなかった。
2人は黙々と馬を走らせる。

さて、焰の姉である施氏だが既に故人である。
今から10年前、当時桃蓮に文官として仕えていた彼女は、視察に訪れていた農村が賊の襲撃を受けたことにより、同伴していた子供共々殺された。

そして今ではその農村は廃村となっている。
それが江が焰から伝え聞いた全てであった。
この話を聞いた時、江は直接面識のない義理の叔母のことに、そしてそれを淡々と語る義母の姿に大きな悲しみを抱いた。

それからしばらく馬を走らせると地平線の果てに建物群を視界にとらえた。

というよりも『元』建物と言った方が適切だろう。最早屋根など存在せず、壁も既に崩壊している廃墟ばかり。
人の気配など皆無だった。

廃村を遠目に見た江は心がざわめくのを感じる。
見た事のない風景。

しかしどこか懐かしく、そして忌まわしい感覚。
その感覚が江の胸を掻き乱す。

やがて廃村の中へと入り、馬から降りると江は目的地に向かう焔の
後について行った。

そして焔が立ち止まった。

目の前には質素な墓標と枯れ果てた花が添えられていた。

「本当は故郷まで持って帰りたいんだけど、死体の損傷が激しくてね…」

声に悲しみを宿して、焔はじつと墓標を見ている。

後ろに控える江にはその表情を読み取れないが、何かをこらえている
であろうことは強く握られた拳から容易に想像できる。

「少し…お話をしましょうか」

立ち尽くしたまま、語り始めた。

「そういえば、あなたにも姉様の話をしたことがあったわね」

「はい。とても優秀な文官だったと。…そしてこの村で賊に命を絶たれた、と…」

江はただ悲痛な面持ちでそのことを口に出す。

「…私が最後に姉様と会ったのは、姉様の子供が生まれた直後だね。然って名前だったんだけど、その子は姉様によく似た赤い髪をした。時折見せる陰りのない笑顔も姉様そっくりだったわ」

当時の様子を懐かしむ目で語る焔。

「姉様はいつも息子に語りかけてた。『いつか孫呉の大黒柱となきなさい』ってね。おかしいわよね。まだ言葉が分からないってのに」

ズキッ

突然襲ってきた頭痛に思わず頭をおさえる江。

「そのあと、私は司馬に任命されて呉、会稽の不服住民の討伐に出た。5年もかかる大仕事だった。残党は他の所に逃げたけど、敵の頭は潰した」

焰はあくまでも淡々と語る。しかしその背中はいささか小さくみえる。

「そして帰ってきたときには…姉様が死んでいたわ」

焰の声がやや低くなる。

「ちょうど桃蓮が長沙へ赴任する直前でね。姉様は事前に視察をしてきたといって息子をつれてここに来たらしいの。…そこをどこから現れたかも知れぬ賊に襲われた」

焰の拳から血が滴り落ちるのが確認出来た。

「姉様の死体を見ることはできなかったけど、致命傷の他にもいくつかの刺し傷があった。息子に至っては死体すら見つからなかった」

ズキッ

また江は頭に痛みを覚える。

火の海と化した村。

そこらに転がる無数の骸。

そして遠くから聞こえる女性の悲鳴。

それらの場面が断片的に江の頭の中をよぎる。

「生存者がいなくて、どの賊の集団かも分からず仕舞い。…そして今から5年前、とある賊を討伐して、奴らの顔を見て驚いたわ」

「…5年前って…まさか」

喉が渴き、やっとの思いで絞り出した声。しかしその言葉を言い終わる前に焰は次の言葉をつづけた。

「姉様の死体の話を聞いて、ずっと疑問に思ってたの。明らかに恨みを持った人間の仕業、でも一体誰が、ってね」

そこまで言うとな焰は言葉を切る。

そして自嘲じみた深い溜息を吐くと、口を開いた。

「なんてことはない、昔呉で私が討ち漏らした残党どもだったのよ。…恐らくは姉様の存在を知って復讐したのも奴らでしょうね」

「っ!？」

江にとって驚くべき言葉。

つまり江が属していた賊は十中八九焔の姉を殺した者たち。

「…今日、人を斬ることはなかったみたいね」

「はい…」

「確かに人を殺さないことに越したことはない」

でもね

焔は強い後悔を宿した目で江のほうを振りかえる。

「最高が最善であるとは限らない。最善を取るために、時には最低な手段を使うことも必要なの。…たとえそれが皆殺しだったとしても」

「分かり、ました…」

「あなたは近い将来、『孫呉の大黒柱』となる時が来るわ。…だからあなたの力でみんなを護ってあげなさい」

ドクッ

心臓が跳ねるように強く鼓動する。

と同時に頭の中の何かをせき止めるものが決壊した。

頭の中を埋め尽くす膨大な情報。

激しい吐き気と頭痛で江はその場に膝をつく。

「江、大丈夫!？」

「…そうか、そうだった…」

突然のことに慌てて江に駆け寄る焰。

しかし江は何やら一人で納得したような言葉を呟いている。

「覚えていなかったんじゃない。…『無理矢理』忘れていたんだ」

先ほど断片的に見えていた光景も、今なら全てが自身の記憶であったことが分かる。

『然、いつか孫呉の大黒柱となりなさい』

『母上』が口癖のように幼い自分に言い聞かせていた言葉。

『あなたの力でみんなを護ってあげなさい』

その時には必ずこの言葉が付いて来た。

『何が、あっても…生き延びなさい。…然、愛してる、わ』

そして血塗れになった『母上』が最後に言った言葉。

『チツ、何だよコイツ。女みてえな顔して、男じゃねえか』

『男のガキでも雑用ぐらいは出来んだろ。憎いあの女の甥だ。精々こきつかってやろうぜ』

下衆の笑みをこちらに向け、そんなこと話し合っている賊たち。

今なら全てを思い出せる。

自分が悲しみに押し潰されないように記憶も感情も抑えこんだことを。

今ならはつきり分かる。

自分は何を為すべきなのかを。

「…そう」

頭痛も吐き気もある程度治まった江は全てを話した。
自分が焰の甥であり、記憶を取り戻したことを。
しかし焰は驚きを見せなかった。

「驚かないのですか？」

「もしかしたらとは思っていたわ。私も桃蓮も祭も。…いいえ、
うであってほしいと思っていた、のほうが適切かしら」

それだけ言い終わると、焰は地面に膝をつき、手をつき、頭を下
げた。

「あなたの母が死んだのは私の甘さのせい。許してくれなんて言わ
ない。殺されたって構わない。でも謝らせて。ごめんなさい」

そう言ったきり、焰は顔を上げない。地面に一滴二滴と滴が落ちる。

ついた手も、頭も、体もふるふると揺れている。

「頭を、あげてください」

低い抑揚のない声で、下げられた焰の頭に声が降りかかる。

その声にビクツと体を震わせながらも、江に殺されるならと、焰は涙に濡れた顔を上げる。

江は無言で焰に近づくと

パンッ

その場に乾いた音が響いた。

「……………え？」

何が起こったのか理解できない焔は呆然とする。

江はそんな焔を強く抱き締める。そして震える声で言った。

「…そんな悲しいことを言わないでください。私に最後の肉親を、私の母を殺させないでください」

「あ、あなたの母親は」

「確かに『母上』は死にました。でも『母様』は私に新しい名前と生きる場所をくださいました。何より忘れていた愛情を注いでくれました」

焔を抱き締める力がより一層強くなる。

「私にとってあなたも亡くなった母上もどちらも大切な母なのですから」

この言葉を聞いた焔は江にしがみつき、江の胸の中で声が枯れるまで泣いた。

その後、城へ戻る江はその道中で密かに誓いを立てた。

我が知、我が武、我が身の全てを孫呉のために使うこと。

それを亡き母上、母様、そして自分自身に誓う、と。

第3話『母様』と『母上』（後書き）

主人公Ⅱ朱才Ⅱ朱然とカオスになってしまいました。

史実で、朱然は朱治の姉の息子で、子供がいなかった朱治の養子になったんでしたっけ？

朱才は確か結構優秀だったけど早死にしたような…

最早記憶が定かではありません。

何で調べなかったんだろ…

ま、いつか。

今回もお付き合いくださいましてありがとうございますm（

ー）m

第4話〜副官〜（前書き）

こちらの更新ずいぶん久しぶりだなあ・・・

いつの間にか総合評価でネギま！に抜かれてるけど・・・

まあそこは原作の知名度の差ってことでいいか

第4話〜副官〜

長江上に霞が出始めた頃、江は最早日常と化した執務室での書類と格闘に精を出していた。

ここ最近、江の傍らには江の仕事の様子をじっと見つめる思春と蓮華の姿があった。その視線には常に尊敬やら憧憬やらが様々な感情が宿っている。

…しかし今日は少しばかり様子が違うようだ。

「…少し聞いてもいいか」

「ええ、構いませんよ」

そんな中、蓮華が江に話しかけた。

江は何やらやつれた顔で、しかし視線を書類に落としたままそれに応じる。

「…何故焰と祭がいるのだ」

そうなのだ。

江が竹簡とにらめっこをしているすぐ横に何故か焰と祭が控えているのだ。

…いや、控えているという言い方は誤解を招くかもしれないのではっきりといおう。

酒盛りをしているのだ。

「……こちらが説明していただきたいくらいです」

海よりも深い溜息をつく江の背中には、負の感情を体現するかのよう
に巨大な髑髏が浮かんでいるように見える。

焰と祭という呉の宿将を前に口に出すことは憚られたが、蓮華と思
春は江に深く同情した。

早朝から取り掛かっていた仕事は昼過ぎには終了した。

竹簡の山と戦うこと、そしてその最中に祭と焰が茶々を入れそれに
対処すること、その2つの事柄のせいで江は精神的に疲弊し、ゴト
ツと鈍い音を立てて机に突っ伏した。

物言わぬ屍に、思春はそつとお茶を供える。

「ところで母様に祭様、今日はどついったご用件で？」

疲れきった表情だけを焰たちのほうへと向けて、江は問いかける。それに対して焰は酒に頬を上気させながらも真つ当な答えを返す。

「あなたの副官について、ね」

「副官ですか？」

「そうじゃ。お主は既に国事に深く関わっておる。ならば副官の一人や二人、ついていてもおかしくはあるまい。それにちよつどいい娘たちがいてな」

祭もまた酒で頬を紅に染め上げながらも言葉を返す。しかし、それに対する江の反応はイマイチだった。

「生憎仕事に関しては手が足りております。それに……」

そこで言葉を切ると、江はチラツと思春の方を見やる。

「副官をつけてしまったら、前々から私の下につきたいと言っている思春があまりにも不憫です」

そう、江の一番の懸念は思春のことだった。

出会い方故か、思春は江に対して強い憧憬の念を抱いている。

そして江も蓮華の副官を立派に勤め上げたら、自分の副官にすると言ってしまっているのだ。

最近の蓮華は思春を気に入っているようで、思春は思春で蓮華に仕えることも満更ではないようだから、別段気にすることでもないのかも知れない。

しかし、それでも自分が懸命に努力して副官になろうとしているのに、その座をぽつと出の誰とも知れない輩に奪われるのは面白くないはず。

そう考えると自らの負担になろうとも、この提案を受け入れるわけにはいかなかった。

余談だが、このやり取りを見ていた思春は何やら惚けた顔で、「江様……」と普段からは想像出来ないほど女の子した声で呟いていた。

「はぁ………ねえ、江？あなたは勘違いしてるわ。思春には文官としての補佐が出来ないでしょ？だからそこをやってもらうのよ」

「それでも……」

といいかけたところで、横から入った言葉に口を閉ざす。

声の主は意外にも思春だった。

「江様、お気遣い感謝いたします。しかし政務の量が膨大なのもまた事実。私のわがままでこれ以上江様の負担を増やすわけには参りません」

「思春…」

思春の言葉に、江は言葉を詰まらせる。

事の次第を見守った焰は、今一度江に言葉を投げかけた。

「それにあなたに副官をつけるのは決定事項よ。大人しくお受けなさい」

「…はい、母様」

思春の気遣いを無下にしたり、決定に逆らうという選択肢を持ち合わせていない江は大人しく従うこととなった。

江の承諾の意を聞き、祭も焰も満足そうにならずく。
そして祭は江に尋ねた。

「ところで、お主が副官に求めるものは何だ？」

「呉への絶対的な忠誠、そして国事を担えるだけの能力、それだけ揃えば構いません」

そして江は即答で返す。

ちなみに『それだけ』と言っているが、一般的常識から見れば、この条件を満たす者は『逸材』である。

この辺りにも、江が自分に、そして他人に求めるモノが大きいことが表れている。

「…ならば性格や性癖の面では問題あってもいいのね？」

「？…別にかまいませんが？」

「そう、じゃあすぐ紹介しましょうか。ついてきなさい」

焰の言葉の中に不穏なものが含まれているような気がしたが、江は特にそれを気にかけることなく返事をし、そしてそのまままだ見ぬ副官の元へと向かうことになった。

- - - - -

「姓は陸、名は遜、字は伯言です」

「……………諸葛瑾 子瑜」

通された部屋の中にいたのは翡翠色の髪をした少女と、黒い髪が目
にまで達している小さめの少女が立っていた。

確かに後者の方は若干内向的には思えるが、別に問題するほどのこ
とでもないように見受けられる。

それだけに先ほどの焰の言葉が江の思考の片隅に引っかかる。

「初めまして。姓は朱、名は才、字は君業………そうですね、この
際真名も預けましょうか。江と呼んでください」

「！」

江の自己紹介に二人は驚きの表情を浮かべる。

その驚きはきわめて妥当である。何せ江と二人は初対面、そして江
から見て二人は下の身分となるのだ。にもかかわらず、一目見ただ
けで真名を許したのだ。

そのことの異常性は誰にでも理解できるものだろう。

「あら、もう真名を許しちゃうの？」

江の横に立っていた焰が問いかける。

その表情には驚きは微塵もなく、むしろ笑みを浮かべている。それ
は祭にも言えることだが…

「ええ、母様たちの紹介する人たちですからね。それに眼を見れば

ある程度人となりはわかります」

「まったく……簡単に言ってくれるの。それがどれだけ難しいことかはおぬしも知っているじゃろう」

江の飾りのない言葉に祭は呆れ交じりの苦笑をもらす。そこへ、3人の会話に乱入者が現れた。

「……あなた、無用心すぎる」

スチャ

短い無機質な音が室内に響く。

「…これはどういったおつもりですか？」

未だに笑顔のまま諸葛瑾に話しかける江。

しかし先ほどまでとは違い、その首筋には不気味に光を反射する白刃が突きつけられている。

そしてそれを見守る祭や焰の表情にも変わりはない。

「……………あなたは自分の立場を理解していない。既にこの呉において確固たる地位を築き、更に多くの国事に携わっている」

「ええ、それが何か？」

「それなのにもかかわらず、隙を見せ過ぎ…あなたはいつ命を狙われてもおかしくない立場」

「確かに命は狙われてもおかしくないですね」

でも

江は言葉を切ると、変わらない表情の中に有無を言わさない強い圧力を加えて、再び口を開く。

「それならば何故私は今生きているのでしょうか？賊上がりであり、他の方々から忌み嫌われてもおかしくない私が」

「……………それはあなたの母親が焰様だから」

「…ふむ、ではもう少し詳しく言いましょうか」

何故今まで何度も暗殺されかかっているのに、今こうして生きてい

るのでしょうか？

ピシッ

「……………え？」

突然、諸葛瑾の握っていた短刀が音を立てて崩れた。そして目の前の男は、諸葛瑾にとって予想外のことを言つてのけた。二つの想定外に直面した諸葛瑾はその能面のような顔にわずかながらの驚愕を浮かび上がらせる。

「頭のいいあなたなら予想がついたはずです。『賊上がりのガキ』が何故抵抗もなく重要な地位に就けるでしょうか？そしてその様を見て、一部の人間が野放しにするでしょうか？」

「……………」

「つまり子瑜ちゃんは『今、江様が生きている』という事実から暗殺にさらされたことがないと判断したわけですね、あ、私のことは穏とお呼びください」

「御名答です。では穏と」

「……………ちょっと待って。じゃあどうやって生き延びて…？」

淡々と答える江と、それに便乗する穩においていかれ、たまらず諸葛瑾は声を上げる。

「答えは今あなたがその手に握っているではないですか」

「!?!?!?!?! つまり」

諸葛瑾の手には既に形を成していない崩れた短刀。それが示している答えとはすなわち……

「そういうことです。暗殺してくる人を『力』を以て跳ね返しただけのこと」

「そ、そんなことできるわけが……」

「現にあなただの短刀は出した瞬間に砕かせていただきましたよ？ もともあなたには見ることはおろか、気づくこともできなかったでしょうがね」

諸葛瑾が反論の二の句を告げる前に江は事實を示し、その弁を叩き潰す。

先ほどまでの無表情がうそのように、少女の顔には焦りの色が見える。それはまるで鬼の首を取ったかのように喜んでいた子供が、次の瞬間にその行動の間違いを知らされたような様子。

「まあ、落ち着いてください」

そんな憔悴しきった少女をいつくしむように、江は目線を同じ高さまで下げると、頭を優しく撫でながらいった。

「確かに多少の読み間違いはあれど、その推察力、そしてこのように実行する胆力、驚嘆に値します。そして何より、わが身を心配してくれたことに感謝します」

「…え？」

「穏も先ほどのやり取りに顔色ひとつ変えない度胸、そして子瑜の考えを的確かつ簡潔にまとめた機転、感服しました」

「私も内心はドキツとしたんですけどね」

「それでもです。感情を表に出さないという軍師の原則にして最大の障害を既に克服しているのですから。どうぞ誇ってください」

それだけいい終わると、江は諸葛瑾の頭から手を離し、元の姿勢になると二人を交互に見やって頭を下げた。

「そんな二人には是非とも、この国を支えるためにも私の副官を引き受けていただきたい。どうぞよろしく頼みます」

ずっと江に驚かされていた二人は、ここで今日一番の驚愕に直面することとなった。

自分よりもはるかに上の存在が『副官になってほしい』と自分に頭を下げている。それは主従という枠を大きく逸脱した行為。その証拠に傍らの祭と焰もため息をつき、苦笑を浮かべる。

「…頭を上げて」

「そうですよ。上に立つ人が軽々しく頭を下げてはいけません」

二人とも内心では大いに驚きながら、江に頭をあげるように促す。対する江は頭を上げると

「力を貸してほしいと頼むからにはそれくらいの礼儀を成さなければ、ね？」

先ほどよりも一層温かみのある笑みで言っただけだ。

「……………夕」

「……………？」

「真名……………夕」

「…それは承諾と受け取っても？」

コクリと小さな頭が縦に揺れる。

「私にも異存はありませんよ」

それにもう一方の少女が続く。

「それはよかった。では今このときより、私たちは仲間ですね」

そう言うと、江は二人の手をとり、そして言った。

「孫呉を導くべく、あなた方のお力使わせて頂きます」

こうして江の副官に2人の文官がつくこととなった。

第4話〜副官〜（後書き）

ん〜ちよいと穩ちゃん出すのが早かったかなあ・・・

正直穩ちゃんは呉の宿将たちとの間に少しばかり壁があるように感じたので

ま、でもどっちにしても出すんだからいつか。

さてと・・・団子娘と猫娘、どっちを先に出すかな・・・

第5話〜訓練〜（前書き）

うむ。

今日もいい感じに薄い内容だ。

ぶっちゃけ第5話、第6話で一つの話になります。

第5話　訓練

「新兵の訓練ですか」

孫呉の本拠地・長沙城内。

それは2人の副官を得てから一月もしないうちのことだった。

今まで日常だった竹簡の山対江との格闘に、2人の少女の姿を加えた光景はもはや日常と化していた。

ちなみに夕と穩が副官になってからというもの、遠慮というものになくなったのか、桃蓮は今まで以上に江に対して仕事を回していた。…もともと遠慮があったのかといえば、それはそれで甚だ疑問だが…ちなみにその仕事内容は雪蓮のものが大半であり、今回の訓練も雪蓮がサボったが故に回された仕事であった。

「……………孫家の我儘姫には勘弁してほしい」

江の近くに配置された机に着いていた夕は、副官になった当時の表情そのままですげやいた。

……………否、若干（眼の下にクマが出来る程度には）やつれているように見受けられる。一方、もう一人の副官である穩はというと…

「それはそれでいいじゃないですか。新兵が江様の訓練を受けたらすぐにでも実戦投入できますし」

意外と元気だったりする。

何はともあれ、2人とも今の生活になじみ始めていることは確かであった。無論こうなるまでにはそれなりの紆余曲折を経てはいるのだが…

それは余談になるのでまたの機会に綴るとしよう。

「まあ、雪蓮の自由人気質は今に始まったことではないですからね…大人しく仕事を受けましょうか」

ここで文句を言わずに引き受けてしまうあたり、江には苦勞人の才能が多分にあるのは間違いないだろう。

江は2人に政務を任せ、調練場に向かうべく政務室から出た。

「何ゆえ、このように天気の良い日に仕事しなくてはいけないのでしょうか…」

江は人知れずボヤク。とは言え年中無休全天候型の江にとって天候などさしたる問題には成り得ないのだが。

「いつか雪蓮に仕事を押し付けて、ゆったりと一日を過ごしてみたいものです」

しかしそんな日は永久に訪れない。

江の仕事が雪蓮に回った日には全てを勘で、さらに細かい内容は度外視されて済まされてしまう。

多額の金や大量の兵糧を動かす繊細な仕事だけに雪蓮には向かない。

故に江が馬車馬のように働くしかないのだ。

と独りごちているうちに江は調練場に着いた。そこにはいつまでもつても雪蓮が来ないことに動揺している新兵約150人の姿があった。

「はあ……」

ため息で落胆の意を示す江。簡単に言えば、この状況は彼の思惑が悪い方向にハマった形だった。

そもそも、雪蓮がこの仕事をサボることは朝には知れていたことがある。

何せ江宛てに書き置きがあったのだから。

それでもなお、江は遅れて顔を出した。

理由は簡単、集団をまとめる者が出現するかどうかを見極めるためであった。

現在の呉には戦略的に足りないものがある。

確かに布陣としては完璧で微塵の隙もない。

中軍に桃蓮、冥琳、夕の本隊。左には焔、右には祭の弓兵部隊。そして後曲に蓮華、穩、前曲に雪蓮と江。どこを見ても豪華であり贅沢な布陣だ。そんな布陣において足りないもの。

それは遊撃隊だった。膠着状態に陥った戦況において、何よりもモノを言うのが戦場を縦横無尽に駆け抜ける遊撃隊である。

今までは江が前曲と掛け持ちという形でこなしてきたが、相手はあくまでも賊などの烏合の衆。

はたしてこれから訪れると予想される戦国乱世ではそれが通用するとは思えない。

遊撃隊に大人数を率いるような統率力には必要ない。ただ1000人を完璧に統率できたのならば、たとえ相手が1万の大軍であつたとしても容易に混乱させることが出来るだろう。

そう言つた意味ではこの場合は格好の試験の場となり得た。

「……………ん？」

ふと視界の端にひよこひよここと動き回る小さな影を捉える。

目を向けてみれば、肩甲骨まで伸ばした長い黒髪を揺らしながら懸命に片刃の得物を振るう少女の姿があつた。

その姿は懸命というよりも何かに駆られ、焦っているといった方が適切かもしれない。

江はそれなりに離れた間合いを無音で一瞬のうちに詰め寄り、彼女の得物を指でつかみ留める。

「えっ!？」

突然現れた文官姿の少年に、少女だけではなく周りにいた新兵達も驚きの声を上げる。

江はその体勢のまま新兵達に顔を向けた。

「孫伯符様の代わりに此度の訓練を担当させていただくことになった一文官です。どうぞよろしく」

『文官』

この言葉に周囲の者は皆愕然とした。それはそうだろう。

何せ、その『文官』が突然、自分たちの誰一人にも気配を察知させることなく眼と鼻の先の距離まで詰め寄っていたのだから。

「さて、自己紹介はこの程度にしておいて…今日の訓練の内容をお話ししておきましょうか」

その瞬間新兵達の表情が強張るのを見て取ることができた。一同、固唾を吞んで、目の前の自称文官の言葉を待つ。

「そうですね…ふむ、ここは皆の親睦を深めるために『鬼ごと』にしましょうか」

『は？』

江の告げた内容に一同が一樣に声を発する。

「…聞き間違いでしょうか？『鬼ごと』と聞こえたような気が……」

先ほどまで得物を振るっていた少女が恐る恐る江に尋ねた。それに對して江は満面の笑みで応える。

「いいえ、あなたの言う通りですよ」

肯定の言葉を聞き、新兵達は呆然とした表情を浮かべる。
そんな中だった。

「少しお待ちいただきたい！」

その声は高く大きく、そして怒りに満ち満ちていた。
声の主であろう長身で小麦色の体躯、そして短く蒼い髪的女性が集
団の奥から人波をかき分けて出てきた。

「何でしょうか？」

その怒声を聞いても尚、笑みを浮かべたまま江はその女性と正対す
る。

「率直に言わせていただこう。調練の内容に納得がいかない。そし
て意味を見出すことができない」

江の疑問の言葉に女性は毅然とした態度で言い切った。その様子を
見て、江は口元に袖をやる。

……… つり上がった口角を隠さんがために。

「それはまた…詳しくお聞きいたしましょう」

「われわれは各々の決意を胸に抱いて、兵に志願したのだ。だと
いうのに、既に名高い孫伯符様が担当してくださるという調練がこ
の馬の骨とも知れぬ文官如きに仕切られ、拳句の果てには兎戯であ
る『鬼ごと』をやらされるとは侮辱もいいところだ！」

ここまで言つて、女性は言葉を切る。本当はもっと言いたいのだろ
うが、さすがにそこは調練の担当者に対するなけなしの敬意で踏み
とどまっているようだ。
周りの反応も『よく言った』という女性に対しての称賛がすべてだ
った。

「……そうですか……」

江はそう呟き俯く。周囲の新兵達はその様子を見て『調練の担当者
が『新兵の一人』に『言い負かされた』と理解したのだ。そう、『
誤解』したのだ。

そしてすぐにその認識は誤りであることを思い知らされる。
ほかでもない江の手によって…

「ならばあなた方は孫呉の軍にはふさわしくありませんね」

しばらく沈黙を守り、ゆつくりと顔を上げた江。
そして彼の眼が新兵達に向けられた瞬間、場の空気は凍てついたか
のような錯覚を覚えるほどにまで冷え切った。

「調練の内容に意味を見いだせない？これはおかしなことを」

ハッ、と小馬鹿にしたように笑い飛ばす。

女性は反論しようとするがそれを思いとどまる。いや、思いとどまらされた。その場を支配する絶対零度の雰囲気によって。

「そもそも『ただやるだけ』の調練など私が、孫呉がすると思いませんか？調練の意味などは兵各々で見出すこと。言われたことしか出来ない忠実な木偶人形など我が軍には必要ありません。欲しいのはそう、指揮官の意図をくみ取り、その場で常に最善を選択できる兵のみ」

ここまで言われて、女性は言葉を失う。反論したいが出来ない。感情が抗おうとしているのだが、理性が白旗を掲げている。

「本来なら兵士同士でやらせるつもりでしたが、気が変わりました。あなた方には地獄を見てもらいます」

江はそう言いながら、調練場の蔵から大量の武器を持ち出す。

「あなた方にはこの長沙城内を逃げてもらいます。そして私があなた方を追います。武器の利用は自由、刻限である日没まで逃げのびるか、もしくは私を殺害するか。それがあなた方の勝利条件です」

『っ!?!』

新兵達はまたもや驚愕させられた。

目の前の文官が自分たちに一対多の勝負を挑み、また勝利条件が己が命を奪うことと抜かしたのだ。とても正気の沙汰とは思えない。女性もこの言動を不審に思ったのか、江に告げる。

「手加減は必要か？」

「ああ、そうでしたね。さすがにこちらが得物を使ってしまつとあなた方を殺してしまいかねない。ということで『コレ』を使わせていただきます」

手に握られたのは少し太めの木の枝。

しかし剣を振り下ろされたらたちまちに折れてしまつような代物だった。

「あ、これだけでは足りませんでした。私を殺すことなど、あなた方には到底不可能ですので、私に『一撃』を加えた時点で勝利としましょう。…無論出来るのであれば殺してくださつても構いません」

冷たい笑みを浮かべた少年の言葉を聞いた新兵達はついに怒号を上げた。

いくら新兵とはいえ、自らの腕に自信がある者が多い。そんな中で

目の前の男がぬけぬけと侮辱したのだ。到底許すことなどできない。

「くっ……いいだろう。やってやろうではないか」

そして先頭に立っていた女性も例外ではなかった。先ほどまで勝っていた理性がついに感情の波にさらわれてしまう。

「了解がとれたので…さあ皆さん散ってください。私もしばらくしたら追い始めますよ」

合図を共に新兵達は素早く、江に対する殺意に満ち溢れた状態で長沙の街へと散っていった。

「さてと…」

その場には二人の人間が残されていた。

「あなたは行かないので？」

「お前を殺しても勝ちなのだろう？」

「なるほど、本気で勝つつもりですか……何と浅はかなことか」

「ふん、すぐにその舌を切り取ってくれる。…徐盛文嚮、推して参る」

片や槍を手にし、殺意をみなぎらせて相對する敵を睨みつける美女。片や木の枝を肩に預け、相對する敵からの殺気を飄々と受け流す少年。

昼過ぎ、日が西に傾き始めた頃、二人の影が急速に接近した。

第5話〜訓練〜（後書き）

ってことで血気盛んな女性は徐盛さんです。

本当は大史慈さんや凌統さんに出てほしかったんですが、前者は個人的な理由、そして後者は甘寧さんとの絡みが面倒だったのでやめにしました。

ってどっちも個人的な理由じゃん

第6話↳訓練↓× 調教↓○↳（前書き）

訓練編終わらなかった。

というか短いな…

でもこの後にあの娘を登場させるからキリをよくするためにはこれがベスト…

とりあえず手抜きですまぬ。

第6話↳訓練↓× 調教↓○↳

太陽が空の中央を通過し、西に傾いた頃。

二つの影が接近し、交差した。

ガキッ

ガキッ

調練場に響き渡る剣戟の音。

この音を聞いた者は、恐らく全員鍛錬の最中と推測し別段気にもかけないだろう。しかしこの戦いの様子を目にしたらどう思うだろうか…

「はあああああああああああああ！！！！」

ガキッ

蒼髪の美女が赤髪の少年に槍を振り下ろす。それもすさまじいほどの速度で。彼が一般の兵士ならば間違いなく頭蓋が陥没、武器で受け止めたとしても、武器を支える腕に罅くらいは入るだろう。

それほどまでに徐盛の攻撃は速く、鋭く、そして重かった。しかし先ほどから聞こえてくる音から察することが出来る通り、剣戟の音は幾度となく続いている。

もし彼が一般の兵士であればよくても腕の骨が粉々だ。

（何故だ！何故受け止められる！？）

「とても素直な軌跡ですね」

だが受け止めている少年は違った。

動きが重くなるほどの殺意をその一身に受けて、それでもなお徐盛の攻撃を軽くないなしている。しかもこともあるつか、正規の得物である槍に対し、そこらに落ちていた木の枝を以て…

ですが…

少年は前の言葉に加える。

「正直読みやす過ぎてあくびが出てしまいます」

通常ならば速攻で粉碎される木の枝で、器用にも徐盛の攻撃を支え、そして次の行動に移る。

徐盛のすばやい突きを木の枝を以て下方へと払いのける。

「なっ!？」

自らの攻撃の力に相手の払いの力が上乘せされ、体勢が前のめりになる。

その身を前に投げ出された徐盛は襲ってくるであろう衝撃に備えて歯を食いしばる。

「まずは」

しかしやってきた衝撃はあまりに軽く、優しかった。

すぐに体勢を整え、再び江と正対した徐盛の眼に拳を握り、朗らかな笑みを浮かべている相手の姿が映った。

「お前…愚弄しているのか？」

声の調子がまた一段階下がる。

それも当然のことである。武人として、戦いの最中に敵に情けをかけられた。これほど屈辱的なことなどあり得ない。

その眼にさらなる殺意を湛えて、徐盛は江に射殺さんばかりの視線を送る。

「そのようなつもりはありませんよ。………ところで」

江はそこまで言って言葉を切る。

そしてその顔に浮かぶ笑みが冷たいものへと変貌して、続けた。

「私の得物はどこに行ったのでしょうか？」

そう言って両手を開いて、前に差し出す江。無論開けるといつからにはその手には何も握られていない。

そのことに、頭に血が上った徐盛は反応が遅れてしまう。

「……………はあ…これで二度ですね」

次の瞬間、徐盛の脳天にまたもや軽い衝撃が与えられた。別段気にすることのない衝撃。

しかし目の前に相手がいて、そして突然自分の上方から与えられた攻撃。いや、そもそもこれが攻撃なのだろうか。

カラン

衝撃から一瞬の時をおいて、乾いた音を立てて地面に木の枝が落ちる。

この瞬間徐盛は理解した。

これも目の前の少年による攻撃であると。

そして理解した瞬間、背筋を冷や汗が伝った。

もしこれが刃物だったら…

少なくとも今自分がこの世にはいないであろうことを理解した。

そしてようやく目の前の少年の正体が気になり始めた。

固より、新兵のうちの一人である少女の背後に無音で、誰にも気付かれずに移動したことからただの文官でないことは予想できた。しかしその程度なら徐盛もすることが出来る自信がある。

「…お前は一体何者だ？文官とは到底思えない」

「文官ですよ。あくまでも分類上はね」

最後の言葉を聞いて徐盛の疑念は晴れた。

（というとは…）

目の前にいる少年は文武両方に長ける存在であること、その武は自分を圧倒する存在であること、そして少年の髪が赤髪であること。これらにもう一つの、決定打になりえる情報を加えようと徐盛は口を開く。

「貴殿の普段の得物h……………」

しかしその言葉を最後まで言い切ることはなかった。

「ガハッ……………」

「戦いのさなかでのおしゃべりは自殺に等しい行為ですよ」

木の枝で腹部を一突き。

たかが木の枝如きでこんなに有効打を与えられることに、意識の薄れゆく徐盛は場違いながら感嘆の念を感じた。
力無くその身は調練場の土の上に横たわる。

「私に負けたことは恥じることはありません。あるとすれば戦いに臨む心構え。此度は敗北を受け入れ、精進なさい」

江は意識が遠のいていく徐盛にそう声を投げかけ、ゆっくりと他の者が散っていった方へと去っていった。
その場に残されているのは徐盛のみ。

（やはりそうか）

もう定かではない意識で思考を続ける。

（やはり彼が私の……恩人か）

それを最後に徐盛は意識を完全に手放した。

この言葉のうちにまた3人の意識を刈り取られた。
その場に残る新兵は残り6人。

「さて刻限はまだまだ先ですか。ならばさっさと終わらせて、皆に話をしましょうか」

眩きの終わりと共に江の姿は霞のように掻き消える。
突然の消失に新兵は驚き、あたりを見回す。

ドサッ

「お、おい！また一人やられ…」

ドサッ

「何で見えないんだ！あいつは化け物か！」

ドサッ

「背後の警戒を頼む！俺は前方を…」

ドサドサッ

「さあ、ここもあなた一人ですね」

最後に残った相手はもはや戦意を喪失し、顔面は蒼白になっている。腰が抜け、膝ががくがくと晒い、そして失禁している。見るも無残

とはこのことかもしれない。

「向かってこない…か」

バシッ

中庭に木の枝で何かを叩く音が響き、その直後、何かが倒れる音がした。

「さて、これであと一人ですね」

『鬼ごと』の生存者、残り一名

第6話↳訓練↓× 調教↓○↳（後書き）

徐盛さん完敗。

そして鬼ごっこもあと一人。

次はいよいよ原作キャラの登場です。

第7話　宝玉の原石（前書き）

受験期ですが一応更新。

だって仕方ないじゃん。

センターで一旦全てのものを使い切っちゃったんだから。

第7話　宝玉の原石

少女は中庭での攻防を見て戦慄していた。

いや、彼女が目にしていたものはもはや攻防と言うには余りにも一方的であり、その事実が攻めている側の少年の実力を如実に示していた。

（完全に見誤ってしまいました…）

少女―姓は周、名は泰、字は幼平という―は油断をしてはいなかった。

もちろん『鬼ごと』が始まる前の挑発的な物言いには反感を覚えた。しかし、彼は周泰の背後に無音で近づき、気取られることなく彼女の振るう直刀を素手で掴み止めたのだ。

それだけで実力という面では相応にあると判断していい。問題はその『相応』の程度を見誤ったことに尽きる。

（残りは私一人ですか）

茂みの中から気配を殺し、中庭の戦況を見つめていた周泰は残りが自分一人になったことを理解する。

そのことに焦りを感じながらも気持ちを強く持とうと奥歯を噛み締める。

（こんなところで負けていたら、この軍には到底入れない）

元々周泰は、劉表支配下の江陵近辺を本拠とする江賊だった。もちろんむやみやたらに人を襲うようなものではなく、むしろ義賊としての面が強かった。

自分の仲間を飢えさせないように、そして貧しい人々を助けるために国内で地位の高い人物が行う不正な取引などの現場を襲撃して生計を立てていた。

しかし、いかに義賊と言っても賊は賊。その行為はどこまで行っても略奪行為。助けられた人々以外にはその事実を許容されることはない。程なくして彼女の集団は、取引を邪魔された悪徳商人の手によって散り散りとなる。

仲間と引き離され、そして自分の生きがいを失った彼女はふらふらと放浪するうちに、とある噂を耳にする。

『江賊として名を馳せた甘興霸が孫堅に下った』と。

周泰は少なからず甘寧に親近感のようなものを覚えていた。江賊であり、かといって無駄な殺生も好まない甘寧の姿勢に対して好感を持っていた。

だからこそ気になったのだ。その甘寧が何故、今になって国に仕える気になったのだろうか。

噂を聞いた彼女はもっと詳しい話を聞こうと長沙へと赴く。

そこで知った事実は彼女を驚愕させるに十分なものだった。

甘寧がこともあるつか孫堅の愛娘、孫権の副官を務めている。元賊を国の宝という存在のすぐそばに置くことの危険性は周泰にも理解できる。

甘寧の性格を鑑みれば、そのような不義理を起こすことはないといえ、思い切った判断には変わりない。

その事実から、周泰は孫呉の軍は自分という存在を正しく評価してくれるということに思い至った。ならば仕官しない手はない。

そう思い、意気込んでこの場にやってきたのだが…

（無防備に立っているはずのに、まるで隙が見当たらない）

目の前にとてつもなく大きい壁が立ちふさがっていた。

新兵も残り一人となったところで、江は一つ息をつく。

先ほどから視線を感じていた。察するに隠密行動に長けた者である。そのことに江は笑みを浮かべた。

（見誤っていましたね…今回の新兵は意外と豊作だ）

最初の印象だけでは判断できないということがよく分かった。

まだまだ到底使い物にならないとはいえ、それなりの人材が集まっていたのだ。江の実力を知るや否や、矜持を捨て去り、多人数での攻撃を仕掛けてきた。

その中には中心となる人物も見取れた。少なくとも孫呉の軍に加わる程度の資格は十分に持ち合わせているだろう。

そんな新兵の中でも特筆すべきは、徐盛と残り一名のみ。恐らく最初に声をかけた少女だろう。前者は粗削りなところや短絡的なところがあるものの、その武勇に関しては戦力になりうる。磨けば、人材の少ない前曲に回すことが出来るだろう。そして自分が遊撃に回ることが出来る。

そして後者、これは情報収集を任せることが出来る。思春と協力されれば、ほとんどのところには潜り込めるだろう。

（そんな有望な人材が集まっているからこそ…）

江は浮かべていた笑みをフツと消し去る。

（ここで驕りを切り捨てさせてもらいましょう）

眼は獲物を見定めた鷹のように鋭くなった。

そして江は視線の感じる茂みの方へとゆっくりと歩を進めていった。

江が茂みに入り、しばらく歩いたところでふと足を止める。

彼は気付いていた。自分をずっと見つめている一対の視線に、そして気配を殺して追跡する存在に。

「さて。残りはあなた一人ですよ」

江はきさくに声をかける。自分からは『視認』出来ない相手に向かつて。

対して、背後の木の上から様子をうかがう周泰は気が気ではなかった。

（間違いなく居場所が割れている…！）

これだけは理解できたからだ。見つめる対象の圧倒的な存在感がそう言っている。『お前の居場所は把握している』と。

どうして、なぜ、どうやって。疑問ばかりが自分の思考を掻き乱す。隠密行動には絶対の自信があつたのに！

『完全』に気配を『殺して』いるのに！

間違いなく向こうの視界には入っていないのに！

もはや彼女の精神状態は通常からは大きく逸脱していた。それゆえに気づくのが遅れてしまったのだ。

今までずっと見つめていた存在が周りの景色に溶け込むかのように

消え去ったことに。

(……………えっ?)

『いけませんよ。気を抜いてしまつては』

声が聞こえてきた。

紛うこと無き少年の声。しかし反響しているようで居場所を特定することはできない。そのことが、周泰をさらなる混乱状態へと追い込む。

『あなたは私の気配をつかめない。それに対して私は見ずとも、あなたの位置を把握できる。どうしてか分かりますか?』

悠長にも少年の声は問いを投げかけてくる。

もちろんその解を混乱状態の周泰に見出すことなどできるわけもない。

『分からないのなら、少しでも助言を。』白装束の集団の中に黒装束が混じっていると目立ちます。』よ』

この答えは宿題です

最後に耳に吐息と共にこの言葉を聞きとった周泰は首筋に衝撃を受け、意識を途絶えさせた。

『鬼ごと』が始まってから数刻と経たず、今だ空高くに陽が残っているうちに終了した。新兵の完全敗北を以て。

捕縛された新兵は全員調練場に連行されていた。彼らの表情は青ざめており、受けた衝撃は計り知れないことを物語っていた。

多少なりとも腕に覚えがあつて孫呉に仕官したにも関わらず、たった一人になすすべもなく鎮圧されたのだ。
当然と言えば当然だ。

「『鬼ごと』お疲れさまでした」

彼らの前に立つ江が不意に口を開いた。

「お分かりいただけましたか？己の身の程がいかほどのものを」

この言葉を新兵は唇を固く結んで聞いている。

「はつきり言いましょう。あなた方は弱い」

きつぱりと言いつ切れ、否定をすることすら許されない。
それほどの差を新兵たちは感じていたのだ。

「今日がもし戦だったならば、私は本気で狩っていたでしょう。もちろんあなた方は間違いなく死んでいた」

厳然たる事実を次々に羅列され、すっかり打ちひしがれてしまう。

「調練とは言え武人たるもの、あそこまでの落ち目が見れば死んだことと同義。ならば…」

江は口角を吊り上げ、優しい口調で言った。

「一度死んだも同然の命、孫呉のために使いなさい。孫呉のために生きなさい」

言い終わってしばらくの間が開き、キョトンとした表情で新兵の面々は顔を上げる。

江はそんな彼らに笑みを投げかけた。

「正規兵の訓練は厳しいですよ？そのことを努々忘れないように」

「そ、それはつまり軍に入れるということか？」

「ええ、もちろん。というよりも元々既に入隊されている皆さんを解雇できるほど、私の身分は高くないですから」

徐盛の問いにも、江は笑顔で応える。

その答えを聞いて、場の空気が一気に弛緩する。

「ただ今回の訓練で皆さんは気づいたはずですよ。心の内にあつた驕り、そして相手を軽んずる態度、それらすべてが死に直結するということ」

江の声色を変えた言葉に応じて、また場の雰囲気が変わる。
安堵の雰囲気が流れていたその場にまた緊張感が漂い始める。

「故にまずは心の持ち様から叩き直してもらいます。次の訓練からはそこを重点的に改善していきましょう。それでは今日のところは解散です」

新兵達は「応っ！」と力強くうなずく。

「あ、あと徐盛、そして最後まで残っていた娘、二人は前へ」

解散し、各々が調練場が去る中、江は徐盛と周泰を呼びつける。二人はビクツと体を震わせながら、江のもとへと歩みよった。江はそんな二人に言う。

「まずは徐盛、あなたには孫策の部隊に入っていただきます。勝手気ままですが腕は確かですので十分に揉まれてきてください」

「は、はっ!」

間違いなく叱責を受けると覚悟して、ここへときた徐盛は新兵としてはまさかの太鼓に、大いに驚きながらも背筋を伸ばし返事をする。

「それと…名乗っていただいても?」

「しゅ、周泰、字は幼平です!」

「では周泰は…甘寧と共に諜報部隊の構成に携わっていただきます」

「りよ、了解しました!」

こちらも直立不動で返事を返す。徐盛と同様、驚きを全面に押し出して。

「…ようやく体勢が整ってきましたね。頼りにしていますよ」

孫呉は着々と力を蓄えていた。

「……………またか」

自らの執務室で机の上にあるモノを眺めつつ、桃蓮は呟いた。
それは先日から頻繁に見かけるモノ。それがまた目の前に現れたのだ。

「最近やけに多いの……………一波来るか」

祭が言葉を重ねる。表情には少し疲れがうかがえる。それはその場に居合わせている桃蓮、焰にも言えることだが。

「ホント嫌な予感しかしないわよね。まるで何かの目印みたい。それと他の所にも出てるらしいわ」

「だろうな。全く趣味が悪いにも程があるぞ」

呟くように話す三人の視線は机の上に置かれた『黄色い布』に注がれていた。

第7話　宝玉の原石（後書き）

再び更新間隔は開きます。

これから私立の一般が待ってるので。

あゝでも何で黄巾を先にしちやっただろ・・・

ではまた次回ノシ

第8話〜虎の決意〜（前書き）

久しぶりの更新。

コメントに目くじら立てたお子様が通りますよ〜

第8話　虎の決意

重苦しい雰囲気と共にコツンコツンと乾いた音が屋内に響き渡る。長沙城の玉座の間、そこには急な召集命令を受け集った孫呉の將たちが待機していた。そして面々の前には椅子の肘掛を指で叩く桃蓮の姿があつた。

表情は真剣そのもの。それはこれから話されることが重要案件であることを如実に表していた。

「申し訳ありません。遅れました」

そんな中、急いだ様子で部屋に駆け込んできたのは江と思春。洞庭湖の畔にある漁村を襲撃した賊の討伐に赴き、そして今しがた帰ってきたのだ。

「構わない。座ってくれ」

無言の桃蓮の代わりに、傍らにいた冥琳が江に着席を促す。江も雰囲気で察したのか迅速に席に着く。

桃蓮は一通り將たちの顔を見まわしてから、ゆっくりと沈黙を破った。

「…ほんの三月前、劉表の古狸が治める江陵から賊が流れてきた」

その声からは感情は感じられない。しかし目を見ると明確な憤怒が宿っている。

「劉表と孫呉は昔から隣接しているが、その仲がすこぶる悪いのは皆も知つてのとおりだ。そのために此度の件も、いつものような嫌がらせだと考えていた」

しかし、と言葉を切る。

その視線はさらに冷たく、鋭く、そして怒りに満ちたものへと変化している。

「つい最近中央から通達が来た。『大乱勃発。直ちに鎮圧せよ』と。…敵は賊、それも黄巾を象徴とした大規模なものだ。各地の兵力を総計すれば百万にも及ぶだろうな」

百万という言葉にさすがの孫呉の屈強な将にも動揺が走る。今の孫呉の総兵力で精々七万。内三万は主だった戦いを経験してはいない。

相手が賊といえども、経験不足は否めない。

無論、それら全てを相手取る必要はないにしても、孫呉が本拠を置くここ長沙は荊州、つまり中央からより離れた辺境の土地。然るに当然賊の数も増える。

最悪の場合、二倍から四倍の相手と戦うことも覚悟しなくてはならない。

「敵の中核は冀州、総大将の名は張角とのこと。そのほかに豫州・許昌のすぐ近くの潁川、そして荊州南陽に大部隊が居座っています。あとはこの乱に乗じて好き勝手暴れている賊が各地にちらほら、といったところでしょう」

冥琳が補足説明をする。

つまり孫呉は当面各地に出没する賊を掃討しつつ、他勢力と連携をとり、荊州においての主力部隊を叩くのが大方針となってくる。しかしここで問題が発生する。

「ではこの乱を治めたとして、その先どう動くのか。この武力蜂起はもはや漢王朝の権力が完全に失墜したことを示している。つまり、大乱を治めたところでこの国に秩序は戻らない」

大乱が起きる。

そしてその大乱を鎮圧するために中央の権力が各地の勢力を頼る。それはつまり中央が独力で押さえつけるだけの力を失ったということの意味する。

そのことを悟り、天下を獲らんという野望を抱く英傑がこの大陸にどれほどいようか。

そう、この大乱の後には間違いなく戦の世・乱世が待ち受けているのである。5年も前からその兆しは現れ始めていた。

江が賊だった頃にはすでに匪賊の横行、そして漢王朝の腐敗は始まっていたのだから。

- いずれは訪れる -

覚悟はしていた。

乱世の兆しを前に自分の国をしつかりと保ち、民を護らんがために牙をむく。江東の虎、孫呉の王はそう決意したはずであった。

しかしどれだけ武威を振るおうと、どれだけ知謀の限りを尽くそうとも敵は内に外にと溢れるばかり。中央で覇権を争い奪うものが現れれば、間違いなくこの荊州にまで戦禍が及ぶことになる。

「かつては天下の兵法家である孫武や孫？を輩出した孫家だが、やがて衰え、そして私の代になってようやく南荊州の権威を取り戻すにいたった」

そういうと桃蓮はゆっくりと立ち上がる。

その瞳には先ほどとは色の違う感情が込められていた。

「もはや孫呉の名は地に堕ちていいものではない。よって私は孫呉の名を天下に轟かせることに決めた」

完全な離反宣言。

実質的な力など持ちはしないが、いまだに権力の象徴として存在する漢皇帝を天下に戴きながら、そしてその皇帝によって荊州の統治を任されながらも桃蓮は現状を顧みてそう宣言したのだ。国を護るために外に打って出ることにしたのだ。

「これから先は全てが天下を取ることに直結すると思え。とはいえこれは反逆に等しい。少しでもそれに抵抗があるなら、この場を去っても構わない」

シンと静まり返る場。

しかし不思議と将の表情には困惑や疑念といった感情は現れていなかった。一番に目につくのは何らかを決意したような、そのような表情であった。

そんな中で最古参たる祭と焰が黙って臣下の礼を取る。するとその場に居合わせた将たちは次々と臣下の礼を取っていく。

その中にはもちろん江の姿があつた。
自らの産みの親である施氏の言葉を思い出しながら。

『いつか孫呉の大黒柱となりなさい』

ただそれだけをかみしめていた。

一途に。盲目に。狂信的に。

それでもこのときは、何の疑念も湧かなかつたのだ。その言葉が到底自分の軸になりえない『枷』であることに気付かなかつたのだ。

とある都市の玉座に鎮座する白髪に白ひげを蓄えた老人。
彼からは普通の老人に感じるような雰囲気は感じない。そばに
いるだけで絡みとられそうな、決して心の音を聞かせてはいけな
いよう

な狡猾な雰囲気。

仏頂面の彼の手には、仰々しく漢皇帝の印を添えられた一枚の書状があった。

「ふむ…ようやく起きたな。？良よ」

書状の内容をあらかじめ予測していたような口ぶりである。無論書かれていることは黄巾の乱についてだ。傍らにいる文官姿の男はその言葉に合わせて、薄く笑みを浮かべる。

「はっ、ようやく起こってくれました」

男はどうやらこの大乱の勃発を喜んでいるようだ。

「これで」

ここで仏頂面だった老人の表情に変化が起こる。

そこには憎しみ、妬み、狂気を湛えた笑みが浮かんでいた。

「長きにわたる因縁にケリをつけられる」

玉座の間に狂ったような高笑いが長く響き渡った。

第8話〜虎の決意〜（後書き）

これで序章は終了。

って何気に桃蓮様に死亡フラグ立ってますね。

はてさてこの先どうなることやら。

第9話 家臣の会令（前書き）

手抜き（・ω・）

つか何かめんどくさい文章になったな。書いてていやになった。

ん？じゃあ直せって？

多分1カ月かかる

第9話　家臣の会合

指針は決まった。

しかし、それでも急激に日常が変わるわけではない。それには二つの理由がある。

一つは、桃蓮が天下を獲ると決めたこと自体が、大陸の覇権の象徴たる漢王朝に対する反逆行為に他ならないからだ。事を明るみに出すにもタイミングを見誤れば、ただの蛮勇だ。

二つ目―これが一番大きいのだが―は、内政や鍛錬は常日頃から取り組むべきことであり、例え天下を狙おうとも狙わないとしても、やっておかなければ国が成り立たなくなってしまう。

特に内政は国民の生活に影響する。殷王朝、秦王朝、そして現在の漢王朝を見れば分かるとおり、民を蔑ろにした国に未来などないのだ。

故に孫呉陣営は敵の主力部隊と合間見えるまで各地に出没する少数の団体を相手にしなければならない。つまり何が言いたいのかというところ……

「いい加減執務室での飲酒はお控えください……」

江の胃痛の種が無くなる日は未だ遠いということである。

いや、江だけでなく、それは夕にも言えることだろう。現に形のよい額に青筋を浮かべている。穏においてはその限りではないのだが。

「そう硬いことを言うな。わしらとてただ飲むためだけにここに
いるわけではないのじゃ」

「…へえ、理由を是非聞いてみたい」

「まあまあ、夕ちゃん落ち着いて。今回ばかりは祭の言うとおりな
のよ」

しれつと抜かす祭に、苛立ち混じりに問いかける夕。そしてそれら
を仲裁する焰。最近度重なる激務とある意味無神経な重臣の態度が、
夕の理性の砦をガリガリと削り取っている。

祭に対しての言動も、夕の苦勞を知る者であれば間違いなく注意は
できない。むしろ江のようにいつまでたっても礼儀正しいのが異常
なくらいなのだ。

「……確かにいつもとは様子が違うのは確かですね」

江はそういつて執務室の中を見渡す。

その場には、江、夕、穩、祭、焰のいつもの面々以外にも雪蓮、冥

琳、蓮華、思春がいた。明命、蒼―徐盛―はまだこの会合に名を連ねるだけの経験も知識も、そして権力もないのだ。

いつもより遥かに豪華な面々をそろえた執務室。その中央に座す焰と祭。それらを取り囲む呉の将たち。今回の会合の議題が祭たちから切り出されることは明白であった。

と、村を賊たちにより廃村とされた民の移住問題に関する最後の竹簡に目を通し、印を押した江はフウと一息つき、視線を義母へと向けた。

「大体予想が付きませんが、此度の召集の理由は何でしょうか？母様」

「あなたはホントにからかい甲斐がないわね。昔はあんなに――」

「母様？」

聡い息子に対してほんの少しの当てつけ。それも不穏な雰囲気を出しながら自らを呼ぶ江によって遮られる。実のところ、最近の江の焰に対する態度は一時期に比べてやや冷たい。

無論江は何の理由もなしに人を遠ざけたり、蔑ろにすることは有り得ない。つまり冷たくされる理由は多分に焰にあるのだ。

具体的に言っと

- ・ 執務中にも関わらず酒に酔って、同じく執務中である江に抱きつく
- ・ やたら江の体を触る
- ・ 食事や酒に怪しい薬を混ぜる
- ・ 朝起きたら、隣に焰がいる（おそらく貞操は無事）

正直江は恐れ慄いていた。これは母の子に対する態度としては常軌を逸している。

他にも掘り返せばいくらでも出てくるのだが、それは今回の本題ではないので割愛する。

「江の過去か…聞いてみたい気もするの――」

「蓮華？」

「ひゃ、ひゃいすみません！」

「江様、お仕事お疲れ様でした」

「ありがとうございます。思春」

思春の、労いの言葉とともに差し出された茶を受け取る江にはもしかしたら暴君の素質があるかもしれない。尤もあるとしたら間違はなく君主に戴くことは有り得ないが。

「さて、話が逸れたの。まあ江以外にも察しのついている者は当然おるじやろうが、桃蓮の言葉についてじゃ」

祭に話を立て直されるあたり、江も相当に壊れているかもしれない。忙殺という言葉がぴったりである。

何はともあれ、祭の言葉により弛緩していた場の雰囲気も引き締め

られる。

「発言とは『天下を獲る』というものでいいのか？」

「ええ、それで構わないわ。蓮華ちゃん」

この面子を集め、尚且つ桃蓮の発言とくれば導き出されるものも自ずと見えてくる。さらに言えば、まだ

孫呉の中でも最高幹部しか知らない内容なのだ。

それを下の者たちに伝えるにも幹部同士で整理や打ち合わせをしておかなければ、のちに障害となるのは容易に想像できることであろう。

「あの発言を受けて、各々はどう思った？どう感じた？」

「まあ私はそんな予感がしてたわね」

「策殿には聞いておらぬ」

桃蓮と同等かそれ以上の直感を持つ雪蓮の意見は正直当てにならない。そう判断した祭はあっさりと雪蓮の言葉を流した。当然雪蓮はいじける。しかし放置する。

「強いて言えば、意外、でした」

とは冥琳の言である。

「へえ、意外って言うのは？」

「桃蓮様は以前より、この南荊州の統治を任されたことに対して、誇りを持っているように見受けられました。それだけに今回のことは予想外だったのです」

「…まあ…確かに、の…」

統治に誇りを持つということは、漢への忠誠を意味することと同義である。冥琳はそう解釈した。もちろん一般的な解釈としてそれは正しい。しかし何事にも例外というものがある。

「…なるほど。桃蓮様の心のうちでは『漢』より『国』のほうがおきくなってしまうたということですか」

「『国』とはまさしく『漢』ではないのか？」

「蓮華、この大陸には古来よりたくさんの国がありました。『趙』、『燕』、『齊』、『韓』など様々です。しかし大陸を統一した勢力は『殷』、『周』や『秦』、そして今の『漢』くらいのもので。そして統一した勢力によって、桃蓮様は南荊州の統治を任されたのです」

「つまり江が言いたいのは『漢』は国家群の総称であって、孫呉は孫呉で独立した国だということ」

「その通りです。いかに強大な国とはいえ、この広大な大陸を一勢力だけで治めるなど不可能。だから各地に有力な諸侯を封じました」

「そして母様は『漢』への忠義を、この地への愛情が超えてしまっただと？」

蓮華の問いに首肯で応える江。

腐敗した国の中枢と自らが命がけで護り育んできた土地、どちらに愛着がわくか自明の理であろう。その場に居合わせた諸将は桃蓮の苦悩を察し、皆押し黙る。

いくら相手が最早体をなしていない王朝とはいえ、忠臣である桃蓮の今回の決断には余程の覚悟が必要だったろう。その覚悟は称賛にも尊敬にも値した。

「でもそうなる厄介になるのが『山越』よね」

しかし空気を読まない者がいた。

先ほど祭によってのけ者にされた孫伯符その人である。

「……………。まあ、それは避けては通れんじやろうな」

少しばかり冷やかな視線を送りつつも、言っていることに間違いはみじんもないので素直に祭は同意する。これは孫呉が勢力を拡大したからこそその弊害ともいえる。

『山越』

会稽以南に広く分布する少数民族の「総称」である。その血は様々なものからなり、かつて戦国の一雄として存在した『越』国の末裔も含まれている。

無論、末裔たちは、そのほかの少数民族に比べて先祖や漢から流れてくる知識、更には技術により『山越』内でも存分に優位性を示し、確固たる地位を保持していた。

そして古来より『山越』は漢の国民にとって敵という認識が大きかった。孫呉に関してはその限りではないのだが…

「その件に関してはきちんと考えていますよ」

この発言により、執務室に偏在する意識は江へと集中する。

「昔から山越と仲良く、もしくは服従させるという考えが存在しました。しかしそれも全て失敗に終わりました。それぞれの集落が独立しているがゆえに」

山越は先にも記したとおり、単数民族ではなく多くの少数民族からなる総称である。故にその内情は一枚岩では断じてなく、対立することもしばしばだった。

「しかし近年山越内でもある集団が抜きん出るようになってきました。越国の末裔を中心とする集団です。彼らは先祖の知識や、我々と多少なりとも言葉が通じるという利点を以てのし上がってきたのです」

「よく調べておるの」

「江様はかねてより孫呉の繁栄と山越の動向は密な関係であるとお考えでしたので」

「力の大きい集団には当然、周りの矮小な集団も取り入ります。そして今回はそのことを利用しましょう」

ここで江は冥琳に視線を移す。

その意図を感じ取った冥琳も口を開き、言葉を発することによってそれに応える。

「つまり山越内でも一大勢力であるその集団との『同盟』を提案しているのだな？」

「同盟!？」

「言葉も通じ、もし通じないとしても孫呉の兵の中には山越出身の者もいるので通訳に回せましょう。そして今の我々に山越と戦う余裕がないのもまた事実。更に同盟によって国力を増すこともできます」

江が山越との同盟を推す理由のもう一つが交易であった。

山越からくる象牙などの装飾品は漢国内でも非常に高値で取引される。つまり、その交易によって国外からの金の収入を増やそうというのだ。

「まだ桃蓮様の耳に入れてはおりませんが、恐らく桃蓮様も同様のことを考えているかと」

「…利点を見ると悪くはないわね。ただ信用できるの?」

「交渉次第で如何様にも」

「クツ、違うない」

この会合において、ひとまず家臣団の総意として『山越との同盟』という案が採用されたのだった。

諸將は去り、夕も処理を終えた竹簡を運びに行き、執務室には江と穩だけが残っていた。

江はさすがに疲労がどつと押し寄せたのか、机に突っ伏したままピクリとも動かない。ふと穩は笑みを湛えながら言った。

「山越との同盟にまで国力を増大させることを考えるなんて、さすがですね」

「おや、穩は考えてなかったのですか？」

穩に対し、江は首を動かさず、顔だけ向けて反応する。傍から見ればえらく滑稽である。

「いえ、考えていましたよ。でも江様の場合、他でもやっているじゃないですか。益州相手に塩を売買したり」

「はて、何の事だか」

江はとぼけてみせる。しかしこれにも理由がある。江たちがやっていることは法に触れているからだ。

塩の販売は漢王朝が政府直々に行っていることであり、その他の取り扱いは許容されていない。その結果民の生活は圧迫されることになる。

そこで江はまず塩の密売に目を付けた。初めは桃蓮も反対してはいなかった。しかし政府が管理する塩はあまりにも高すぎる。あまりにも民

に厳しい。そうなるかと桃蓮が折れるしかなかった。

当然それらの動きを監視する役人もこの荊州、揚州にいる。だから役人には賄賂を握らせた。幸か不幸か赴任してきている役人は皆汚職を重ねてきた愚図ばかりであり、二つ返事で了承した。何より彼らはどう塩を製造するのかさえも知らなかった。

塩を作るのにはどうすればいいか。

江は考えた。簡単なことだと。海水を蒸発させればいいと。知つての通り海水は塩辛い。ならば絶対塩が含まれている。海水を整備した海浜に引き、天日で蒸発させれば、より塩辛い海水が出る。

あとはそれを火で熱すれば、塩が残るのではないか？江はそう考えた。そしてその考えは間違っていなかった。

とはいえ、これは揚州まで勢力を広げた呉だからこそ出来たこと。それを益州でやろうにも海がない。塩は高級品。結果塩は足りなくなり、民に負担がかかる。

そのことを察し、江は益州太守・劉焉に密使を送った。そして密売経路を確保し、今に至るのだ。今となつては二つの勢力の仲は良好。これも今後にはいい影響を及ぼすだろう。

「賊上がりだからこそそういった思考も出来た。そう考えるとあの5年も無駄ではなかったようですね」

そう昔に思いを馳せる江。彼が思い浮かべているのは、亡き実母のことか。あるいはその地獄の日々か。はたまたその両方か。いずれにせよ、儚げに物思いにふける江に、穏は声をかけることができなかった。

第9話〜家臣の会合〜（後書き）

ちよいとサブタイトルつけようかね。

その方が内容がわかりやすい。

主に読み返すときの自分のため。

第10話 蒼の始まり (前書き)

まあめちゃくちゃな内容だが許してくれ

第10話　蒼の始まり

家臣団での会合からは二十日ほどの時が過ぎ、雪蓮は頻発する賊の討伐のため、桂陽に赴いていた。

敵本隊は荊州の中でも北端に位置する宛、南陽付近に駐屯している。しかし当然本隊以外にも、この乱に乗じた小さな賊集団が各地に存在する。

敵本隊の規模はおよそ二十万。

それらを相手取るには、孫呉ははっきり言って力不足であった。単独での攻略が不可能である以上、孫呉が取るべき手段はただ一つ。他勢力と足並みを揃えた上で本拠地を叩くことだ。

しかし何事にも時機というものがある。時勢はまだ敵に傾いている。したがって今は領内での被害を最小限に抑えるべく、多少後手に回ったとしても、地道に賊の討伐を繰り返すしかなかった。

「まったく手ごたえがないわね」

そんな彼女も今は帰途に着いている。

元々今回の敵の絶対数が少なかったこともあるが、練度で勝る孫堅軍が同数以下のただの賊に遅れを取るなどあり得なかった。

雪蓮が戦場を駆ける間もなく、敵の悉くは鎮圧され、桂陽の平和は保たれた。しかし雪蓮にとっては不完全燃焼もいい所。内に秘める業火をただただ燦らせるのみだった。

「とは言え桂陽の平和は維持された。敵が弱いに越したこともないので？」

「そうは言ってもつまんないのよねー。これから天下を狙うのになんなことばかりでいいのかしら」

馬に跨り、ムスツとしている雪蓮に、同じく賊討伐に従軍していた蒼―徐盛―は諭すように言葉をかける。ただその言葉も雪蓮の不満を解消させるだけの効果を示すことは出来なかったが。

「江殿も今は雌伏の時と仰られたのだ。それは雪蓮殿も了承したではないか。それにあの方が言うには黄巾も一年と持たず瓦解することだ。ならば私はそれを信じるのみ」

蒼は江の言葉を根拠に雪蓮を諭そうとする。

「……………」

しかし雪蓮は何も言わない。何も言わず、ジツと蒼の顔を見つめているのだ。

最初は考え事でもしているのかと放っておいた蒼だったが、さすがにずっと見つめられていると居心地が悪くなる。たまらず声を荒げて切り出した。

「私の顔がそんなに珍しいか？」

「そんなんじゃないわよ。…ただね」

そこまで言っ言葉を切った雪蓮の表情は、先ほどまでの膨れっ面とは別のものとなっていた。

まるで新たな玩具を見つけた童のような笑顔。

否、そんな純粹なものではない。正しくは玩具は玩具でも、弄ぶといった意味での玩具を見つけた悪戯鬼のような笑み。

この瞬間、蒼は遅れながらも悟った。自分から切り出したのは失敗だったと。

「なあんでそんなに江に肩入れするのかなあ、なんて思っちゃったのよね」

「そ、それは…」

自らまさしく虎穴に飛び込んだ蒼は狼狽する。しかし焦ったところで時既に遅し。獰猛な虎は慌てふためく獲物を見逃したりはしない。

「その辺をゆっくり聞かせてもらおうかしらね」

今から三年前のことだ。

揚州のとある村が賊に襲撃された。当然村人は抵抗したが、悲しいことに武の心得のない者ばかり。救援を求めようにも、その土地には領主がいなかった。結果早々に村は制圧された

男は皆殺しにされ、女子供は野蛮な者共の慰みの道具として扱われ、心が壊れた者は畜生のように殺されていった。

慰み者となった女子供が次々に精神を病み、一人一人余興として殺される中、ある一人の女は、例え身を犯されようとも屈さず、正気を保っていた。

死にたくない一心で。 毎日のように嬲られようとも、女は屈さなかった。

そして村が落とされてから二月が経過した朝、女は異変に気づいた。誰も来ないのだ。そして外では喧騒と剣戟が響いているのだ。どうやら賊は何者かと戦っているようだった。

監視もいず、好機だと察した女は、もう檻褸切れとなっていた自らの衣服を被って必死に逃げ出した。逃げる途中、賊と赤い鎧の兵が戦っているを見た。

赤い鎧の兵士たちはたちどころに賊を切り捨て、突き殺し、蹂躪していった。

断末魔を上げる賊たちを尻目に女は必死で走った。赤い鎧の兵士たちが味方である確証がなかったから。

と、突然女は肩を掴まれた。振り返るとそこには賊の頭領がいた。その傍らには馬があり、それが逃亡するためのものであることは容易に想像できた。

賊の頭領は暴れる女を縄で縛りつけ、乱暴に馬に乗せると自分も馬に跨った。女は覚悟した。もう終わりだと。

馬は走り出し、根城の景色がどんどん小さいものへとなっていく。女は最早茫然自失であり、絶望していた。

ふと賊の頭領は叫び始めた。

先ほどまでの下卑た笑みが、恐れおののいた表情へと変わっている。そして前方に向かってしきりに罵声を浴びせているのだ。

女は無気力に下げていた頭をもたげ、前方を見やった。

そこには一人の男が立っていた。

ただ赤い直垂を着、鼻まで赤い布で覆い、赤い髪を風になびかせたその者は馬の進路上に悠々と佇んでいた。

肩には身の丈以上の大剣を担いでいる。

馬がその者を蹴り殺そうとした刹那、女の体は宙に浮いた。一瞬のことなのにやけにゆっくりに見えた。

馬の首から上が宙を舞い、体躯は後方へと仰け反っていた。そして女はもちろん、賊の頭領もその身を投げ出されていたのだ。

賊は受身を取れぬまま、大地に叩きつけられ、女も同様になると覚悟し、来る痛みにも備えた。

しかし痛みを感じることはなかった。代わりに何かに抱きとめられる感触がした。赤い髪の男が受け止めてくれたのだ。

一瞬の出来事に啞然とする女。そんな女に、その者は目で示した。

もう大丈夫。
もう安心していい。

言葉は交わさないのに、そう言い聞かされているような気がしてならなかった。

男は女の縄を解くと、やさしく大地に下ろし、大剣を担いで、賊のほうへと歩み寄る。

腰を抜かし、後ずさることしか出来ない賊は失禁し、ひたすら命乞いをしていた。

涙と鼻水で顔面を濡らしたその顔は醜悪そのものだった。

すると男は背を向けた。その行動に呆気に取られた。

見逃すのか。

許すのか。

両親を、友を殺した、自分を慰み者としたその賊を野に放つのか。

怒りがこみ上げる。信じた瞬間に裏切られた気がした。

賊は男の行動に歓喜した。生きながらえたと喜んだ。その顔には品性の欠片もない醜い笑みが浮かんでいた。

しかし、男の担いでいた大剣がぶれた。

次の瞬間にはその笑みの鼻から上はなくなっていた。

男の担いでいた大剣がぶれた。

その次の瞬間には首から上がなくなっていた。

主を失った賊の体は、切り口から泉のように血を飛び散らせて力なく横たわった。

女は直感した。

賊に背を向けたのは、決して許すというためではない。その醜悪な死に顔を見取ることすら拒絶したのだと。

一部始終を見届けた女の下に歩み寄ると、男は泣きそうな声で言った。ただ一言。

申し訳ございません

最初何故謝られたのか分からなかった。しばらくして、その場に彼の配下と思しき兵士たちが集まり、近くに築かれた賊の根城まで行軍した。

女は腰が抜けたようで、終始赤い髪の子に背負われていた。

賊の根城には賊や、慰み者となった女子供の惨たらしい亡骸が多数横たわっていた。

彼は配下にすべてを埋葬するように伝え、女に向き直った。そして口を開いた。

これら全ては、自分たちが遅かったが故に引き起こされた惨劇です。どう罪滅ぼしをすることも出来ません。

ようやく謝られた理由が理解できた。

しかし得心は行かなかった。救援も何も要請していなかったのだから。

それだけ言い残すと彼は配下と共に埋葬に取り掛かった。その背中はやけに小さく見えたのは、果たして女の気のせいだろうか。

しばらくして、女の下に一人の兵士が駆け寄ってきてこう言った。

どうか彼を悪く思わないでほしい。彼の本来の任務は呉郡の掌握であり、呉にたどり着いたのは三月前のことなのだ。

そして情報収集のために各村々を回っていくうちに、この会稽付近に巢食う賊のことを聞くに至った。

彼は悔やんでいた。あと少し来るのが早ければ、と。

今ここにいることは本当は命令違反だ。それでもこうしてやってきた。知るものすべてを殺されたことを承知で言う。どうか彼を悪く思わないでほしい。

もとより女は彼らを、彼を責めるつもりなど毛頭なかった。

しかしこの話を聞いていると、女は彼に興味を持った。一体どこの誰なのだろうか。

それを兵士に聞いたが、彼らは命令違反をした上官のうわさが広がらないようにしようと、徹底して正体を明かすことを避けた。

しばらく後、彼女は呉の曲阿にある村に預けられ、やがて自分を救った部隊が孫堅軍のものであるということを知った。

それから二年と数月、孫呉の軍に憧れ、また恩人との再会を夢見て、彼女はひたすら武芸を磨いた。時には寝食を忘れ、月と陽が二度通過することもあった。

幸い女にはわずかながらにも武芸の才があつたのか、修行を始めて二年でそこの賊には負けないほどの力を手にし、孫呉への仕官のため、意気揚々と本拠地長沙へと向かった。

「その女が無事に恩人に会えたかは知らないが」

長い話を終え、蒼は一息つく。

隣の雪蓮はというと、要らぬことを聞いた自分を責めているのか、

押し黙るのみ。

「……蒼、悪かつ」

「でも」

謝罪の言葉を述べようとする雪蓮。

しかしその言葉に被せて、蒼は再び口を開く。

「女はきつと後悔していないだろうさ。生き残ったことに。そして
武芸を鍛え、孫呉へ仕官したことに」

「…そう」

明るい笑顔でそう言い切り、蒼は馬を雪蓮の先へと進めていく。
悲しみを背負う強さ、そして憧れへとまっしぐらに進める強さ。そ
の二つを兼ね揃えた女性の後姿に、雪蓮はただ頭を垂れる他なかつ
た。

第10話 蒼の始まり (後書き)

徐盛さんの真名は『蒼』^{そう}となりました。

いやあ、難産だった。

まあ批判はたくさんございましょうが、これも前々から書くつもりだったことなので悔い無し。

第11話 湘江西岸の戦い (前書き)

やっとの思いで更新・・・

課題やらバイトやら多すぎる。

誰だよ。

大学生になったら時間がたくさんできるとかいった阿呆は

第11話　湘西西岸の戦い

太陽が真上に差し掛かるよりも少し前の頃合い、湘江の畔では激しい乱戦が繰り広げられていた。

得物と得物がぶつかり合う音。

鉄が肉を引き裂く音。

そしてその度に戦場に響き渡る断末魔。

つい今朝までは平穏であったその大地に大きな血の池を作りながら、戦はまだ続いていた。どちらの装備も粗末なもので、そのことが互いに賊であることを端的に示していた。

「江様」

そんな戦場を大河の上から見やる集団の中で呉の将・周泰が、彼女の前にて戦況を見つめる朱才に声をかける。

その言葉に江は一度頷くと口を開いた。

「そろそろ頃合いですね。総員、上陸および戦闘準備を」

合図を待っていたかのように、彼らを乗せる船の群れは岸へと近づいていく。それらに乗るはおよそ100人。

その100人の各々が武器を構え、士気を高め、目の前の戦場に乱入することに意識を集中させていた。

時は少し遡り20日前。

このとき、長沙に二つの報告が舞い込んでいた。

一つは黄巾党が湘江からほど近い村を襲撃、そしてそこに砦を築き、根城としているということ。その数なんと3000。

もう一方は洞庭湖南岸を本拠地としている、大乱以前からの賊が大乱に乗じて縄張りの拡大を図っているようであるということ。こちらの数は1800。

困ったことに、両勢力の位置はかなり近い。互につぶし合うのなら、その火の粉が周りに降りかからぬように兵を出さねばならず、統合しようものなら更に多くの兵を差し向けなければならない。

そしてさらに事態は悪い方向へ流れ、どうやら両勢力が手を取り合うような動きを見せ始めた。

しかし先にも述べたとおり、今は大乱の只中。ただでさえ将も兵力も足りない中で、総計5000近くの賊を討つには、それこそ最低でも2500以上の兵数、そして優秀な将が必要である。

自身で賊の討伐に出立した桃蓮の代わりを務める焰は、自室に江を呼び出して2000の兵を預け、それらを以て、2つの大規模な集団を殲滅するように命じた。

「本来ならもう少し兵力を与えたいんだけどね…」

彼女の言葉からは最低限度の兵力すら与えられないことへの自責の念がこもっていた。

だが対する江の発した言葉に、焰の自責の念は一瞬にして驚愕へと変わる。

「いえ、2000ですら過分です。500が妥当と言ったところでしょう」

「なっ!?!」

思いがけない提案に、焰は猛烈に反対の意を示す。

「何を莫迦なことを言ってるの! 統合したら、間違いなく他の小勢力を吸収して5000は超えるのよ! ? 500じゃ太刀打ちすら出来ないわ!」

「ご安心ください、母様。両勢力が協力するなどあり得ぬことですから」

江は至って冷静に言葉を返した。

その冷静な江の様子に、焰の高ぶった感情は徐々に削がれる。背もたれに乱暴に身を預け、焰は額を抑えながら江に問うた。

「江がそこまで言うということは、当然何かあるのよね？」

「ええ、もちろん。それともう一つお借りしたい者が…」

笑顔で返す我が子に、焰は嘆息を漏らすほかなかった。

そして時は再び現在へと戻る。

ゆっくりと岸に近づく船団の上で、江は明命に聞いた。

「ところで手配は済みましたか？」

「はい！」

元氣な返答に江は頬を緩ませながら、視線を前へと向けた。

船団の速度は一気に上昇する。ついに岸に船を着けたとき、江は声高らかに宣言した。

「総員がかれ！一人たりとも逃すな！大地を、草木を賊共の血で朱に染めよ！」

言葉を皮切りに上陸を果たした孫呉の精兵は次々と戦場へと流れ込んだ。

敵兵の眼前へと迫り、次々に屠りながら明命は思考を巡らせていた。現在の状況を整理しているわけではない。ましてや次の展開に備えてというわけでは断じてない。

(こつも上手くいくとは)

彼女の脳裏では、現在の指揮官である江によって伝えられた作戦の全貌がよみがえっていた。

「軍には慣れましたか？」

練兵場で汗を流していた明命は、突然声をかけて来た江にあわてた様子で礼をする。

「は、はい！おかげさまで何不自由なく！」

「そうですか」

少しずれた答えにも、江は微笑みで返す。
そんな暖かな笑みに口を半開きにしながら見とれていた明命は、我に返るとすぐさま話を転換する。

「なな何かお話があったのではないですか？」

「？…まあ確かに話がありますが」

急な転換に合点のいかない様子だったが、気を取り直したのか表情を引き締める。

それを見て、これから話される案件が重要なものであると察した明命も呼応して、今までの笑みを消して表情を引き締める。

「以前からあなたには諜報部隊の編成を頼んでいましたね？」

「はいっ！思春殿に協力してもらったおかげで、実戦に使える段階

にはなっているかと…」

最初のはきはきと言っていたが、次第に声が尻すばみになっていく。恐らくは結果を見るまで、確信というものが持てないのだろう。

「そうですか。では今回は最終試験の場としましょう」

「最終試験、ですか？」

「ええ、今洞庭湖の畔に二つの賊の大勢力があることをご存知ですか？」

「はい、何でも最近互いに歩み寄る動きが…まさか」

自分の知っている情報を口にし、ハッと息を呑む。その様子に江は満足げな笑顔で応える。

「察したようですね。今回の任務はとても簡単なものです」

母なる長江に巢食う下賤な者たちには、下賤な者同士で潰し合っていたきましよう。

江の眼光は明命を射抜かんばかりに鋭いものとなっていた。

江の作戦はこうだった。

最近になって互いに歩み寄る動きを見せていた二勢力の不和を生じさせ、疑心暗鬼の状態までもっていったところで、少数の兵を以て片方の勢力を皆から釣りだす。

あとはそのままもう一方の勢力の方へとおびき寄せれば、向こうから攻められたという事実が出来上がるというわけだ。

「不和を生じさせるには…ふむ、使者を使いましょうか」

まず孫呉から無条件降伏を求める使者を両勢力に出す。当然相手はそれを突っぱねるだろう。何せ自分たちは仮にも大勢力なのだからそれくらいの推測は容易いものだ。

そこで明命たち諜報部隊の出番である。

互いの勢力に『もう一方が降伏をするらしい』という噂を流させる。もしそれをまるで信じなくとも、事実確認をするために、使者くらいは立てるだろう。

あとはその使者を屍にして砦の前に晒しておけば、疑心暗鬼な状態の出来上がりだ。

とはいえ、ただ仲たがいを起こさせるだけでは周りの被害なども想定できない。だからこそ江は回りくどくとも、自分たちが戦場を制御するために、少数で砦から釣りだすという手をとることにしたのだ。そうすれば戦いの始まりから場所まで自分たちの支配下における。

「まあ当然それだけではないんですがね」

江の浮かべる薄い笑みに明命は背筋の凍る思いをせざるを得なかった。

時は三度現在へと戻る。

今の戦場は洞庭湖に注ぐ湘江河口付近。周りには低湿地帯があり、葦などで見通しは相当悪い。そんな場所をわざわざ戦場に選んだのには理由というものがある。

「頃合いですね…」

江は呟くようにそう言うと、右手の大剣を高々と掲げた。それを合図に孫呉の兵100人はサッとその低湿地帯の外へと出る。

「今です！」

明命の張りのある声と共に、戦場に突然火が起こった。交戦中に孫呉の兵に奇襲を受けてなお自分の置かれた状況に気が付かなかった

察しの悪い賊も、ここでようやく気が付いた。全ては孫呉の仕組んだことなのだと。

「し、死にたくねエよ…」

賊のうちの誰かはそう言った。言ってしまった。

心の中で呟くには大いに構わなかった。しかしそれを口に出してしまった。そして不幸なことに他の者の耳に、その言葉は届いてしまった。

言葉にされることによって、より鮮明に『死』の恐怖が襲いかかる。ただでさえ死に体の身に活路があるとすれば…

「うわあああああああああああ……！！！！！！！！」

逃げることだけである。各々の勢力は各々の皆へと逃げ帰っていった。

統率のとれていない賊というのは存外脆いものであり、一人が戦場に背を向ければ、連鎖反応で次々と離脱する。それは賊の頭がいくら止めようと、黄河の洪水を100人で抑えようとするようなもので不可能なのだ。

逃げだした集団を、近くに伏せていた孫呉の兵200が明命の指示のもと追撃する。もう一方の集団は江によって追撃される。

必死になって駆ける。振るう。慟哭をあげる。

ただただ生にしがみつこうと躍起になる。だからこそ気付かなかった。

自分たちが寄る辺としている砦に『誘われて』いることに。

孫呉の兵の追撃は緩慢とも言えるものだった。優れた指揮官が賊のほうにいれば、この違和感の正体に気が付いたかもしれない。

しかし敵は生き残ろうと必死、更に数だけが頼りの集団。この緊急事態において、どうして己の命以外のことを考えようか。

江が担当する集団も、明命が追尾する集団も、砦の門が仲間を全て呑みこむと同時にその口を固く閉ざした。そして大損害は受けたものの、自分の身が無事だったことに心から安堵した。

「全く…無知とは恐ろしいものです」

「自らが棺桶にその身を横たえたというのに」

明命と江、二人ともまるで別の場所にいるというのに、連綿として言葉が続く。

『合図を』

違う場所にいる二人の声が重なった時、それぞれの砦から大火が生じた。

固く門を閉ざしたのが災いした。冷静を失った者たちが殺到する門はついぞ開かれることはなかった。

炎は砦を焼き尽くし、後に残ったのは人間の焼けこげたにおいと、もはや何であつたか判別の付かない燃え滓だけだった。

この戦いは江の機智を周囲に知らしめる戦いとなり、江の名前は南荊州に広まることとなった。

第12話予兆（前書き）

他の小説も含めたら、3日連続の更新。

これだけ頑張れたのはいつ以来か・・・

まあこれも塾の2学期が始まるまでなんだけどね。

第12話　予兆

「そうかそうか」

玉座に座し、書簡を目にして満足げな笑みを浮かべるのは、いつぞやの老翁。
もたらされた報告は彼の意に沿うものだった。

「本来なら乱に乗じて討つ計画だったが…」

「はい、これで大義をも手に入れることが出来たというものです」

以前？良と呼ばれた男もそれに応じ、口角を吊り上げる。
玉座の間には剣呑な空気が流れていた。

「それにしても急いたな、小娘」

「急かしたのは一体誰でしょうか？」

呟く老翁―劉表―に問う？良。
老翁は表情そのままに答えを返した。

「はて、何の事だか分からぬな。ただ『偶然賊が孫呉の領土へ流れた』り、『偶然一族や豪族が離反した』ことはあつたのう。いやはや、そう考えると致し方ないと言えは致し方ない、か」

その表情に浮かぶは嘲りか狂気か。
いずれにせよ真つ当な感情など皆無であることは必然であつた。

所変わつて孫呉の本拠地、長沙。
頻発する賊の出現がようやく一段落し、つかの間の平和を享受している孫呉では、来る戦に備え軍議が重ねられていた。

「天下を獲るといふのなら、大方針としてまずは江陵以北の劉表を打倒しないと」

「ええ、それに奴とは昔から仲が険悪だったから、それで何ら問題ないわ」

軍議の席には孫呉の参謀である焰、冥琳、夕、穩、そして軍権を持つ祭、江、雪蓮、最後に君主である桃蓮がいた。

「ただ乱に乗じて、というのは少しかり風聞によろしくないでしょうね」

「うむ、儂は乱を終結させ、その後漢室の権威が失墜したことを世に知らしめてから事を起こすべきじゃと思つておる」

「私も同意だ。今は乱の最中。民を守らずして天下など世迷言もいところだ。それに余裕がなくなればそれだけ人は短絡的になるからな」

「なるほど、つまり今起こせば、『乱集結を遅らせる』、そして『王朝の命に背く』という二重の非難を浴びてしまうということですね」

最近になって成長著しい双丘を揺らしながら、穩はうんうんと頷く。その様子を夕が忌々しげに見ていたことには敢えて触れないでおう。

さて、ここで上記の会話の流れをまとめておくと、

- ・直近の目標は他勢力との共闘にて、荊州北部にある南陽に巢食う約20万の黄巾勢力を打倒すること
- ・乱集結まで導き、世相の漢室に対する不満と懷疑が蔓延したところで、漢からの独立を宣言
- ・長年に渡る因縁を持つ荊北の劉表を破り、荊州全土を掌握

となる。

荊州は過去『楚』という大国があつた土地。

広大な領土と南蛮との交易により、国を富ませることは難しいことではない。人口もかなり多い。国力を上げるにはそう時間はかからないだろう。

そして全ての準備を終えたら、中原へと進軍していけばいいのだ。

「でもここから南陽までは随分と距離があるんじゃないかしら？」

どうやら最近の雪蓮は雰囲気をぶつた切ることに長けているように感じる。

しかしこの雪蓮の指摘は至極真つ当なものなのだ。長沙からでは、江陵、襄陽と二つの大都市を隔てる場所に位置するため、参陣するにもかなりの労力を必要とする。

不幸中の幸いか、南陽付近までは長江からその支流である襄江、そして更にそのまた支流である白河を経由することによって船で行くことが出来るのだ。

「そうなると不安が残りますがね……」

それは江のみならず、他の将もみな同じ考えだろう。何せ当面の敵である劉表の膝元である襄陽を通るからだ。まだ悟られるような動きをしていないはずではあるが、そもその仲が険悪なのである。何が起ころうと不思議ではない。

「用心するに越したことはないな」

桃蓮の弦きはその場にいる全員の気持ちを代弁したものだっただ。

「フン」

男は気だるげに目の前の大河を眺めていた。

男の名前は黄祖。その武勇は非常に高く評価され、かつては孫権の副官まで務めるまでの者だった。しかし生来の高慢な性格が災いし、結果今は長江を挟んで江陵の対岸に位置する公安港の守りへと左遷された。

「退屈な日々だ」

そう漏らすのは無理もない。

公安港は長きにわたる因縁がある劉表と接する土地柄、孫呉にとつては重要な拠点となっているが、その実付近には村や街などはまるでない。要するに娯楽がまるでないのだ。その点を考慮すれば黄祖の漏らす愚痴はやむを得ないことであるのは承知いただけるだろう。

「それもこれも全てはあの男のせいだ…」

周りに人がいればその耳に届くほど、強く噛み締められた齒。それほどまでに深い怨恨、強い憎悪を向けられる相手とは

「許さぬぞ、朱君業」

孫権の副官ということは、呉における王族の側付きである。位の高さとしても重臣級とまではいかないまでも、それなりの地位であった。

そして姫君の副官ともなれば、当然戦に出る機会も、活躍する機会も、何よりその活躍を君主の眼に焼き付ける機会も存分にあるというものだ。

そもそも桃蓮が何故蓮華にこの男を付けたのかは、前にも述べたとおり蓮華の慢心を取り除き、そして江の力を示すためであったのだが、当然黄祖本人は自らがダシにされたことを知る由もない。

そうになると、黄祖から見れば、突然付けられた副官に出番を搔つ攫われ、更には自分を蹴落とされたと錯覚してもおかしくはない。

「賊上がりの下賤な身分の者が…」

かつて夕が江に聞かされた暗殺者の話。そのうちの一度は黄祖によつて仕組まれたものだつた。当然江が生きているということはその暗殺は失敗に終わったということだが。

というわけで、黄祖の江を恨む理由には事欠かないということは分かつてもらえたと思う。

「っ！誰だ！！！」

不意に黄祖は振り向き、怒号を上げる。夜となり、すっかり暗くなつた辺りをかかり火が照らすなか、暗がりからザツザツと足音を響かせ、人影は近づいてきた。

闇に紛れるためであろうか、黒い外套を深々と被り、そしてその者は黄祖の構えた剣の射程距離ギリギリで立ち止まる。

「黄祖殿とお見受けする」

深々と被つた外套の奥で、その者は薄気味の悪い笑みを浮かべていた。

第12話 予兆（後書き）

黄祖が孫呉に所属とかマジ笑える。

笑いすぎて吐き氣してきた。

第13話 不安の理由 (前書き)

オラ、こんなに短い話書いたの初めてだ。

とりあえず次の話を考えると中途半端になるので、今回はこれで許してくれ。

第13話　不安の理由

孫呉の精兵4万は襄江を溯る。

領内の黄巾党はほぼ討伐し尽くした。とはいえまだ治安は安定してはいない。故に対劉表用に2万、そして国内の治安維持に1万、計3万を残して、孫呉は外へと打って出たのだ。

そんな彼らが向かう先は南陽。

荊州における黄巾勢力の主力が集まる彼の地には、荊州の雄たちもまた集結しようとしていた。

乱勃発から半年あまり、ついに決着をつける時が来たと、各々は判断したのだ。

「江、風はどうだ」

襄江の流れの上に身を置くということは当然船団にて移動していることを意味する。

甲板にて流れを見ていた江の背後から声がかかる。その声と共に船室から姿を現したのは、彼の君主である桃蓮であった。

「いい風が吹いています。この分では恐らく10日と経たないうちに安昌へと辿り着くでしょう」

江の言う安昌とは南陽の南に位置する地である。

そこまでは船を利用し、そこからは陸地を行軍して、南陽の目と鼻

の先にある博望に陣を構える予定だ。船団は既に江陵の横を通り過ぎており、そろそろ樊城に差し掛かるところだ。

「そうか…」

その言葉に桃蓮は肯くと押し黙る。
らしくない君主の様子に少しばかり違和感を覚える江。

「さて、では私は部屋に戻るぞ」

どうしたのですか。そう言葉にしようと口を開いた矢先に、桃蓮はこう言い残して元の船室へと消えていった。残された江は呟く。

「何か嫌な予感がしますね」

雪蓮のがうつりましたかね。
軽口を続ける江であつたが、その表情は冴えないものであつた。願わくばこの予感が大外れであることを、彼は望んでいた。

今回の遠征には多くの兵を動員した。

しかし兵がいくら多くとも、それらを指揮する将が少なければ元も子もない。したがって、従軍する将もかなり多く、また質も高かった。

桃蓮、そして補佐役の祭、江、冥琳を筆頭に、操船に長けた思春、明命、武勇に秀でた凌操と黄祖の8名の将とその下に付く副将で、総勢18名という顔ぶれ。

これだけの陣容をそろえたのは間違いなくこれが最初のことだろう。孫呉にとって此度の戦はただの乱鎮圧以上の意味合いがあった。

この戦で大功を上げ、風評と名声を手に入れる。そのためには地味な勝利ではなく、派手派手しい勝利、つまりは圧倒的な戦を展開しなければならない。

それを踏まえれば、これだけの布陣を揃えても何ら疑問ではない。

「ふむ、嫌な予感のう」

船室にて江はさきほど感じた予感について話した。とはいえ、江でさえ漠然とした予感の根拠が皆目見当もつかない状態では、祭もどうしようもないのは必然だ。

「僕は堅殿や策殿のような、狂った直感などないのじゃ」

狂った、とは失礼かもしれないが、あながち間違いでもない。否、

実的に射ている表現である。

「それは承知の上です。ただ気に留めておくだけでもお願いいたします」

それでも万事に備えるのもまた名将の条件だ。その点において、江は実に厳密だった。不安材料をとにかく減らそうと躍起になっていたのかもしれない。

「承知した」

祭の同意の言葉に深々と頭を下げると、江は船室から辞した。陽の落ち、すっかり暗くなった裏江。

その上を、松明によって照らされた船団が静かに進む。

煌々と燃える松明の火さえ呑みこんでしまうのでは、と錯覚するような暗闇を前に江はまだ不安を抱いていた。

昼間にも感じた同様の予感。それは桃蓮に対するものか、それとも孫呉に対するものか。いくら根拠を求めようと、解は一向に出ない。この時、江はまるで考慮していなかった。

己に降りかかるかもしれぬ災厄の可能性を度外視していた。

運命の齒車は、錆びついた音を奏でながらも確実に回り始めていた。

第13話 不安の理由（後書き）

うむ、文章が乱れておる。

もう少し書くことまとめてからじゃないとあかね。

そういえば最近感想コメントの方に返信できておりませんが、ちゃんと読ませていただいております。

ただ返信する暇があるなら本編書け、というお声が聞こえてきそうなので、執筆を優先している次第であります。

これからも感想など、どうぞよろしくお願いいたします。

余裕があるときに返信させていただきますので。

第14話 策々（前書き）

タイトルが思い浮かばね。

第14話 策

荊州南陽

東西北を険しい山や関に囲まれたこの土地は、広大な荊州の北端に位置する。

冀州にて、張角率いる黄巾党が蜂起をしたのと時を同じくして、こちらでは張曼成が兵を興し、そして太守を殺害、南陽の宛城を占拠した。

漢都・洛陽にほど近く、また周囲を劉表、袁術ら有力な勢力に囲まれているために日々戦が絶えず、その過程で張曼成は命を落とすこととなる。

この指揮官の後継として選ばれた趙弘は徒に兵を損ずることをよしとせず、略奪以外には宛城に立て籠もることを選択した。

「まあ今となつてはその選択は愚かであつたという他ないのだが」

そう漏らすのは孫呉の頭脳とも言える存在、周公瑾。

彼女ら・孫呉の軍勢は今、その宛城の南方に位置する博望に陣を構えていた。

「ええ、おかげさまでそろそろ向こうの兵糧も底を尽くようです」

そんな呟きに応えるのは、孫呉随一の智勇を併せ持つ将・朱君業。
安昌に到着したときに、江は既に配下の明命、そして思春に命じて、敵の本拠である宛城を探らせたのだ。その結果得た情報が兵糧の不

足である。

当然の帰結である。何故ならば、敵軍総帥は強力な勢力との接触を避けるために略奪も近場で済ませていたのだ。

しかし一度略奪をおこなえば、その都市は当分の間廃墟のままである。つまり彼らは限りある資源を後先考えず食いつぶしていたのだ。そしてその兵糧が尽きようとしているときに孫呉の軍勢が南方に陣取ったのだ。

「しかしこの機を見逃さなかったのは我々だけではないようだな」

「桃蓮様…残念ながらそのようですね」

二人で遠方の宛城を見やる背後から、彼らの君主である桃蓮が歩み寄り、会話に入ってきた。

桃蓮の言う『機』とは当然兵糧が底を尽く今、ということ。そして見逃さなかった勢力とは…

「やはりあの古狸も出張ってきたか」

忌々しげに奥歯を噛み締める桃蓮。彼女に古狸と呼ばれたのは荊州太守にして、荊州における紛うことなき最大勢力・劉表。

彼らは孫呉が何とか捻出して出陣した4万という軍勢をあざ笑うかのように、その倍以上に当たる10万の兵を率いてきた。現在は呉の陣より20里ほど前方に待機している。

だがこの地に目を付けた勢力はもう二つあったのだ。

一方は汝南の雄・袁術、そしてもう一方は官軍である朱儁。

どちらも8万の軍勢で押し寄せている。

黄巾20万 対 討伐軍30万という大戦が今起ころうとしていた。

「ふむ」

孫呉の陣、桃蓮の天幕。

君主である桃蓮の過ごす場として相応しいほどの大きさの天幕には、遠征に連れられた18名の将がすっかり収まっていた。

中央には軍議用の机と椅子が置かれ、将各々が自分の席に鎮座する。その机の上には城の見取り図のようなものが置かれていた。

「固いな」

上座に座る桃蓮のすぐ側に鎮座する祭は、目の前の図を見てそう漏らした。

その対面に座る冥琳もその言葉に肯く他ない。

「向こうの戦力は20万、実質戦力としても16万はいるでしょう。」

それに比べて我らは4万。しかも安昌の港に5千の守備隊を置いているのです。到底我らだけでは太刀打ちできません」

冥琳の言葉に周囲は沈黙に陥る。

「更に今回は怨敵たる劉表もいるのだ。袁術も朱儁も我の強い者だ。連携など夢のまた夢だろうな」

桃蓮の付け足しで、場の空気はまた一段階重くなる。

相手の兵力を鑑みるに単独での攻撃は不可能、かと言って共闘しうにも周りが協力しないことは明白。八方塞がりもいいところだ。大人しく他勢力が動き出すのを待つしかない。そう誰もが感じていた時…

「協力しないのであれば、せざるを得ない状況に追い込めば良いのです」

赤髪の少年は口を開いた。

「兵糧を失えば、向こうは打って出るしかありません」

「しかし、まだ兵糧は一月は持つものと思われませんが…」

江の言葉にやんわりと反論を発するのは思春。
彼女の言葉通り、黄巾の兵糧はすぐさま尽きる程には切迫していなかった。

「ならばその僅かながらの兵糧さえも消してしまえばよい」

「っ！…なるほど」

江の考えが読めたのだろう。穏は感嘆の声を上げる。

「江様は敵の兵糧庫を襲撃しようと思ってるんですね」

「そうか！無理やりにも兵糧を燃やしてしまえば、向こうに打つて出る以外の選択肢はない…」

次々に将たちは納得の表情を浮かべる。

「宛城の見取り図から分かる通り、兵糧庫は南西の外れに位置し、更に恐らくは敵兵の宿舎であろうこの建物の死角に位置しています」

江の口から淀みなく流れ出る言葉に将たちは心底感嘆していた。しかしここで横槍が入る。

「でもそれで兵糧庫を襲撃するのよね？そのあとはどうするのよ」

桃蓮が長子・雪蓮である。

雪蓮はただ疑問に思ったことを口にしたただけなのだが、気分の乗ってきた周りの将からは「少々」冷たい視線を向けられる。

「それに関しても考えていますよ」

そう言つて江は、今一度見取り図に手を置く。

そして指さすのは宛城の中の北に位置する少しばかり小さめの建物。

「ここが恐らくは敵総帥が居座っている場所です」

「その心は？」

「北方には崖、東西には兵舎がある。まるでこの建物を守っているようではありませんか？」

江の問いかけに、祭は無言で同意を示す。

「そこで私の考える方針はこうです。まずは凌操殿、雪蓮で南門に攻撃を仕掛け、思春率いる諜報部隊が城内北西の家屋に火をかけます。そしてそちらに敵兵の意識が集中しているすきに、今度は明命が率いる部隊で兵糧庫を強襲、燃やし尽くします」

「して、その次は？」

「当然敵兵の意識は兵糧庫へと移ります。今度は思春の部隊で城門を開放、南門前の凌操殿たちには、城内侵入後、混乱する敵兵を更に混乱させ、東門、西門から外に誘導していただきます」

「そうやって朱儁や袁術に雑兵の始末を押し付けるのじゃな」

「後は我々の総兵力を以て、趙弘がいるであろうこの建物を襲撃。首級を上げれば…」

それ以上のことを江は口にしなかった。

そして再び周囲を沈黙が支配する。皆桃蓮の言葉を待っているのだ。

「一つ聞こう。江よ、この策の本当の狙いは何だ？」

「さて、何のことでしょうか？」

「とぼけなくていい。東門や西門から敵兵を追いつ出すことは分かった。それを袁術、朱儁に押し付けることもな。だがこの地に討伐軍は四勢力いる」

江の作戦のなかで終ぞその名前が出なかった勢力。

「四つのうち三つの勢力は大小の差はあれど功を上げた。そのよう

な状況下で『不運』にも何の手柄も立てられなかった勢力の長は果たしてどう感じるでしょうかね…」

「ククツ、気に入った。実に心地よい計略だ」

その顔に笑みを湛え、桃蓮はゆっくりと立ち上がる。そして並みいる武将の顔を一つ一つ見つめて、やがて口を開く。

「孫呉は朱才の策を採用する！」

「ははっ！」

江は臣下の礼をとり、跪く。

「甘寧！周泰！」

「はっ！」

「お前たちは直ちに部隊を編成せよ！先の策の通り、宛城内を混乱の極地へ誘え！」

「御意！」

「凌操！孫策！お前たちは1万5千の兵を以て宛城南門を攻めよ！作戦成功後は、東西の門より城内の敵勢力を宛城から追い出せ！」

「「応っ！」」

「朱才！黄蓋！」

「「はっ！」」

「お前たちは甘寧の火計成功後、弓兵部隊を率いて、東西門の前より火矢を射かけよ！城内を紅に染め上げよ！」

「応！」

「御心のままに」

「周瑜は自分の補佐を、残りの将は本隊に属し、策が成った後に宛城を襲撃、大将首を狙え！」

「ははっ！」

「作戦決行は明日の未明とする！各々しっかりと準備しておけ！」

天幕の中に桃蓮の凜とした声が響き渡る。

一通りの指示を出し終え、改めて江の献策を称賛する桃蓮に、他の将たちも同調し、尊敬と称賛の言葉や眼差しを送る。

ただ一人、憎しみと憤怒をその眼に湛えた者を除いて

第14話 策（後書き）

何と云うか執筆時間が2時間の割に、ここまで駄文だと萎える。

第2章はあと数話で終わりかな。

第3章の前に予告みたいのを挟もうかね。

第15話 裏切り (前書き)

長い。

まとまってるない。

くどい。

書き直せ？

数カ月後になるがいいか？

第15話　裏切り

射干玉めばたまの闇が明るく照らされる。

それは、これからゆつくりと顔を出そうとしている朝陽のせいでも、ましてや寒々と地を照らす月光のせいでもなかった。

四勢力が包囲し、そして睨みをきかせていた荊州における黄巾党の本拠・宛城は、まだ暗い大地を照らす焚火のようになっていた。

「先遣隊は城内の敵を東西へと追い出せ！我ら本隊は敵総帥を討ち果たす！」

既に三門が開放され、東西の門には黄色い布を身に付けた将兵が、文字通りに降りかかる火の粉から逃れるべく殺到していた。

対照的に南門には桃蓮の号令を受け、意気軒昂たる孫呉の精兵が雪崩のように押し寄せる。城内はまさに混乱の極みへと達していた。

「っ！東西に兵舎を置くあの家屋は…伝令！『敵本拠を発見した』と本隊に伝えよ！」

前をひた走る孫策、凌操の部隊は眼前に敵総帥の住まいを見出すとすぐさま伝令を走らせ、行動を開始した。

ただでさえ速かった進軍の速度をまた一段階引き上げ、またたく間に迫っていく。この時点で戦の趨勢は決していた。否、勝敗など火計が成功した時点で決着していた。

劫火に巻かれた城内、逃げまどう雑兵共を無視し、進軍を続けてい

た部隊はついに本拠への侵入を果たした。
そして東より陽がすっかり顔を出した頃には、宛城内には勝鬨が響き渡っていた。

敵総帥・趙弘は雪蓮の手によって打ち取られた。

荊州黄巾党には他にも孫夏、韓忠と主だった将がいたのだが、孫夏は朱儁の手勢により、韓忠は袁術の手勢により、それぞれが討ち果たされたのだ。

当初の目論見通り、差はあれども手柄を見事に分け合った形である。20万いた雑兵も、大半は城内で焼死、仮に外へと逃げ出すことに成功しても待ち受ける討伐軍に例外なく抹殺された。

「撤退ですか？」

しかし孫呉の陣内に流れる空気は決して大勝した直後のそれではなかった。

君主たる桃蓮が撤退を宣言したのだ。

確かに戦が終わった今、この地にとどまることに利点と言うものはまったく言っていないほどなく、むしろ不利益を被る可能性の方が高い。

まず一つは地勢。

陣を構えた博望は谷と言うべき土地。見通しが利かないのだ。

第二にこの地の支配権。

南陽に関しては、既に正規の太守が殺されているためにまた新しく王朝から新任が派遣されるだろう。そのことにはまるで問題がない。しかし、この地に至るまでの土地に関しては大いに問題がある。

荊州南部と荊州最北端である南陽を結ぶ線の中には、襄陽、江陵が立地する。つまりは怨敵・劉表の支配都市の中を行軍せねばならないのだ。

こちらが向こうを敵視しているのと同様に、向こうもこちらを目の敵にしている。その道は間違っても交わることがない。

そんなこんなで桃蓮は一刻も早く本国へと戻ろうと考えたのだ。

「お待ちください」

しかしそんな彼女の言葉に異論を唱える者がいた。

江でもなく、冥琳でもなく、ましてや祭ですらない。

「何だ、黄祖」

桃蓮の視線の先には武人の姿があった。

そして彼は堂々と自分の考えを桃蓮へと告げた。

「戦を終えたのは今朝のこと。また将兵は夜通し作戦にあたり、その表情には疲労が見えています。少なくとも一日はこの地にて休息を取るべきではないかと」

「うむ、確かにのう…」

祭は黄祖の言葉に肯く。

彼の言う通りであった。今朝の作戦は昨日の昼には決まっていた。そこから今朝実行するという電撃作戦を展開するためには、かなり急速に準備をする必要があったであろう。

またそこまで無理を推してでも準備をしなければ、相手の虚を突くこともできなかった、ということも紛れもない事実である。

戦の最中は気分も高揚し疲労など感じることはないが、戦を終え、緊張の糸が切れた今ならばその限りではない。

「確かにそうではあるが…」

それでも桃蓮の答えは歯切れの悪いものだった。

その胸には一抹の不安を抱いていたのだ。その不安も漠然としたもので形を成さない。だからこそより一層不安を煽ることになってい

るのだ。

しかし桃蓮のような飛び抜けた直感を持たない者たちには、その不安を感じることさえできなければ、桃蓮の焦りも理解できるものではない。

天幕内は黄祖の案に賛同する意見が大半を占めた。

もしここで桃蓮が反対意見押し切っても撤退を宣言したならば、将兵はそれに倣っただろう。しかし桃蓮はそれをしなかった。せつかうの戦勝の雰囲気上台無しにすることは、彼女とて避けたかった。結果的に黄祖の案が採用され、長沙への凱旋は一日遅れることとなった。

江には一つ疑問があった。

奇襲作戦が成功し敵総帥を討ち取ったところには、孫呉の陣近くに布陣していた一つの勢力が撤退を開始していたことだった。

普通自らが出し抜かれたと悟れば、無理にでも挽回しようと軍を動かすと思うのだが、劉表は城内から上がる火を見るや、将兵に撤退を指示した。

そして昼過ぎである今には、この地からはとうにその存在は確認できなくなっていた。

それでもこれは都合の悪いことではない。こちらが撤退を始めた時

に彼の勢力が背後にいたとなれば、それだけで気を遣わなくてはならない。

そういった心配がないだけでも、孫呉にとっては好都合だった。

江の持つ『では何故劉表は背後から牽制するという手段をとらなかったのか』という疑問を除けば…

それから五日が経過した。

一晩休みを挟んだ孫呉の軍勢は、かなり体力を回復し帰国の途に着いた。

戦における一番の手柄をあげた故か、行軍中の雰囲気はなるほど和やかなものであった。ある一つの報せが来るまでは。

「孫堅様は何処いずこに！」

それは突然のことであつた。

行軍する軍勢の前方から馬にまたがった一人の兵卒が駆けてきたの

だ。その鎧は返り血を浴び、背中には幾本かの矢が突き刺さっている。

「何事か！」

桃蓮は声を張り上げ、自らの存在の場所をその兵卒に示す。

兵卒は息も絶え絶えにそこまで駆け寄ると、すぐさま下馬し、桃蓮の前に跪く。

「報告いたします！安昌の港が劉表の軍勢により襲撃を受けました！その数およそ一万五千！」

「っ！？…先手を打たれたか」

桃蓮の不安は的中してしまった。

江の疑問は負の方向でその答えを得てしまった。

「古狸め…やってくれるっ！」

今は見えぬ怨敵相手に揶揄の言葉を口にするが、それも虚しく空へと消える。

すぐにそのしかめっ面を引き締めると、桃蓮は指示を出し始めた。

「周泰、孫策、凌操、黄蓋！至急一万の兵で安昌へと向かえ！…周瑜！ここから最短の道筋は分かるか」

「ここからだと一度白河沿いに出るのが妥当でしょう。直進すれば丘陵地が多く、進軍の妨げになりかねません」

「黄蓋！お前が大将として軍を率いよ！古狸の手勢に戦というものを教えてやれ！」

「承った！」

返事をする祭はすぐに動いた。

そして一刻と経たず、軍を編成し南方へと駆けていった。

「我らも悠長に行軍するわけにはいかん！全軍駆けるぞ！」

先遣隊が出発して少し経ち、今度は桃蓮率いる本隊が全速で行軍を再開した。

本隊の将兵の表情には、ただ一人の例外を除いて焦りの感情が刻々と刻まれていた。

白河沿いの荒地を赤い軍勢が疾走する。

歩兵にとっても騎兵にとってもその行軍は常軌を逸したものだだったが、弱音を吐くような兵はこの孫呉の中にはいなかった。

彼らは先頭をひた走る彼らが主君の背中をただ必死に追いかけていた。

軍勢が河岸段丘を右手にした時、不意に何かが桃蓮の頬を掠めた。

「うぐっ！」

苦悶の声をあげ、背後で何かが地に落ちる音を聞く。

慌てて進軍を停止し、背後を見れば、そこには物言わなくなった己が将の姿があった。停止していた思考が再開される。

「チツ、伏兵か…！総員、崖の上に伏兵だ！全速力で駆け抜ける！」

足を止めていた軍を再度走らせる。

そんな中で桃蓮は自らの甘さを悔いていた。

頭のどこかに、劉表から仕掛けてくるといふ可能性を否定する考えがあつたことを。

先手を打つのは自分たちだと信じて疑わなかつたことを。

降り注ぐ矢の雨に味方が次々と命を散らせる中、桃蓮は悠長にもそんなことを考えていた。

それは油断に他ならなかつた。

軽い音がした。

少なくとも衝撃を感じた。

現実に無理やり意識を引き戻された桃蓮は自分の腰に目を遣る。

「……………抜かったか」

そこには一本の矢が深々と突き刺さっていた。

激痛が襲う中、彼女の意識ははつきりとしていた。しかしそれは意識だけであり、体が言うことを聞くとのこととはまた別問題。

グラリと彼女の体は傾き、落馬の様相を呈する。
筋を傷つけたのか、それとも痛みにより麻痺したのか、あるいは毒を仕込まれていたのか。答えは定かではないが、下半身が言うことを聞かない。

「桃蓮様！」

体が重力に逆らえず、落下しそうになったところで、桃蓮の名を呼び、その体を支える者があらわれた。

「ッ…江、か」

流れ出る血により、白い顔になりつつある桃蓮は、自らを支える者に声をかける。
そして自嘲気味に言った。

「これは、抜かった、わ。完全に、して、やられた。自分の、甘さ故よ」

痛みに堪えて、桃蓮は言葉を紡ぐ。
そんな桃蓮を江は叱咤する。

「自分を省みることなど、あとで幾らでもできます！今はただこの場を生き抜くことをお考えください！」

「ほ、報告！」

その時、後方の兵が全速力で寄ってきた。
江は無言のまま、その兵に先を促す。

「軍後方にて黄祖將軍が造反！それに伴い三千の兵が寝返り、軍勢は背後から追撃を受けております！」

「なっ！クッ…」

「桃蓮様、落ち着いてください」

江はそう諭すように言う。桃蓮を支えるために速度を落としていた江たちを、背後から攻撃を受けている兵たちは次々に追い越していく。

そうした中で、寝返った黄祖相手に殿を務めていた思春とその手勢がようやく追いつく。

「桃蓮様！ご無事ですか！？」

慌てて駆け寄る思春に、桃蓮は首肯を以て応える。

最早声をあげる余裕もなくなっていた。そして思春の後方には既に黄祖の軍勢が迫っている。

と、ようやく右手に崖、左手に白河という地形の出口が見えてきた。

「出口が見えました！全員全速力で駆け抜けてください！」

江の言葉に従って、殿を務めていた軍勢は一気に、この不利な地形を駆け抜ける。

そして出口に差し掛かった時。

「さてと」

江が馬を止めた。

突然の不可解な行動に桃蓮も思春も、そして兵たちも驚く。しかし加速のついた兵たちは容易には止まることが出来ず、結果江たちを追い越すこととなってしまふ。

「殿お疲れ様でした」

そう言つて桃蓮たちの方を振り返る江の顔には、いつものように穏やかな笑みが浮かんでいた。

そして先ほどの怒号とは打って変わって、これまた穏やかな口調で話す。

「皆さんは、このまま南下し、先遣隊と合流してください」

「…江様はどうするのです」

江の言葉は『江』のことについて触れられていなかった。
思春は江に問うた。

「私は…」

そう言うと、馬蹄を踏み鳴らし、追撃せんとこちらに迫る軍勢のほうを振りかえり、そして言った。

「彼の者たちを引き受けます」

「し、しかし」

「こ、江、お前、な、にを…」

多勢に無勢とはまさにこのこと。
あまりの言葉に思春だけでなく、桃蓮でさえも声を上げる。

「桃蓮様、これは極めて適切な判断です。まず君主であるあなた、そしてそれを護衛する思春、最後にその周りを固める兵士たち。そう考えると、ここで足止めのために捻出出来るのは私一人です」

「足止めならば私が」

江の言葉に更に反対の意を示そうとした思春。
しかしその言葉は最後まで言われることはなかった。

「聞き分けよ!!!」

江の言葉が遮ったから。

「お前では足止めにすらならない！お前よりもはるかに強く、場数を踏んだ私が適任だと言っているのだ！孫呉の将たるお前が自身の實力を見極められないでどうする！」

「っ！」

叱咤は幾度となく受けてきた。

それでもここまでの、怒号とも言えるものは思春にしても、桃蓮にしても初めての体験だった。江が怒りを顕わにしている。そのことに気を取られていると、江は馬上から降り、そして大剣を振るった。大地に一筋の線が引かれている。

「今この瞬間より、何人たりともこの線を跨ぐことを禁ずる」

そう言う江は、桃蓮とそれを支える思春が乗る馬へと歩み寄る。

「桃蓮様、あとでまたお会いいたしましょう。そして思春、しっかりと桃蓮様を護衛してください」

笑いかけると、馬の尻を蹴り上げる。

急な衝撃に慄いた馬は飛び上がって、前方へと駆け出す。

「さあさあ、皆さんもしっかり護衛をお願いしますよ。……ではまた」

踵を返し、江は追撃部隊の方へと歩いて行った。

背後から聞こえる、遠ざかる馬蹄の音に、江はもう耳を傾けなかった。

「茶番は終わったか？」

「はい、わざわざお待ちいただいてありがとうございます。…黄祖殿」

眼前にはいつしか顔を合わせたきりの副官の姿があった。その副官の表情は狂喜の感情に彩られている。

「俺の目的はもとより貴様だ、朱君業。あの日の屈辱、片時も忘れたことはないぞ」

「ふむ、私も罪な男ですね」

「…そう、それだ。その余裕、その表情、その振る舞い、貴様の何もかもが俺を苛立たせる！」

狂った笑みを浮かべながらも、その眼には憤怒の感情がこもっている。

黄祖は手にした偃月刀を振るうと言った。

「語らいはこれで終わりだ。…者共かかれえ！…！」

合図とともに、黄祖の配下たちが江に襲いかかる。

しかし、江の刻んだ線を越えようかというところで、その配下たちの首から上は消し飛ぶこととなる。

「な、何をした！？」

何が起こったのか理解できない黄祖は声を荒げて、江に問いたです。
対する江は、あくまでも余裕の態度を崩さない。

「おやおや、いけませんね」

「何をしたのかと聞いている！」

「私は言っただけですよ？」

何人たりともこの線を跨ぐことを禁ずる、と。

「くつ、少々厳しいでしょうか」

自身に殺到する兵を次々に薙ぎ払う江の口から弱音が漏れる。しかしそんな中でも振るう大剣の鋭さは少しも衰えていない。薙ぎ、穿ち、砕き、斬る。この単純ではあるが至難の業を、江は幾度となく繰り返し返している。江は周囲を取り囲んでいた兵士たちを全力で吹き飛ばした。

と、前方から一人の兵が槍を構えて突撃してくる。ひとつ前の攻撃で大ぶりをした江の隙を突いた形だ。

「いい判断ですね。しかし一人で来たのが失敗だし」

ザクッ

「誰が一人だと言った」

腹部に感じる激痛。

痛みを訴える部位を見れば、突き立っているのは偃月刀。

攻撃の出所は何処だ？

何故今自分は攻撃を受けたのだ？

江の脳裏にそんな疑問がよぎる。

「じふっ…」

口から血があふれ出る。

そしてその偃月刀を辿っていくと、それは眼前の兵士の腹部から突き出ていた。その兵士の表情は驚愕と苦悶で溢れかえっていた。その背後から声が聞こえる。

「油断したな、朱才」

膝をつく江を見下すのは黄祖。

そう、黄祖は自分の部下ごと江を串刺しにしたのだ。その表情は下卑た笑みに歪む。

「ようやく、ようやく果たせた！俺をここまで追い詰めた男への復讐を……！」

そう言って、跪く江の顔を蹴り上げ、そして頭を踏みにじる。

「っ！」

「ハハハハハ……！ほら、どうした。いつもの余裕は何処へいった？無敵の朱才様よお！」

ひたすら江をいたぶる黄祖。

しかし江は何の反応も示さない。

「……興ざめた。……死ね」

黄祖の得物が振り下ろされる

ガキッ

ことはなかった。

突如前方から飛んできた矢を、黄祖は偃月刀で防ぐ。その隙に、何者かが江を抱えて走り去った。

偃月刀の向こう側には見知った顔があった。

「こ、黄蓋！何故貴様がここに！」

「あら、酷いわね。祭だけじゃないのよ？」

「!？」

とつさに飛びのいた黄祖。

そして少し前までいたあたりには得物が振りおろされていた。

「さっきぶりね、黄祖」

「孫策…だと…安昌の港はもう制圧されたのか」

「ええ、そういうこと」

雪蓮の背後には孫呉の兵士が並ぶ。予想外の事態に混乱する黄祖。しかし数瞬のうちに結論を出した。

「者共、撤退だ！」

言つや否や、馬にまたがり、駆けだした。

「…逃がさないわよ」

身から溢れる憤怒を隠そうとしない雪蓮は追撃を開始しようとする。

が、それを祭が制する。

「策殿！それよりも今は江じゃ！」

「っ！そうだったわね！」

血濡れの江を抱えあげると、雪蓮と祭は馬にまたがり、兵を従えて南方へと駆けていった。

両軍が撤退し、誰もいなくなった荒野には両軍の兵の屍が無数に横たわっていた。

第15話 裏切り (後書き)

いやあ、今回はきつかった。

次回で、第二章は終わりだよ

第16話 理想の終わり・現実の始まり (前書き)

久しぶりの連日更新。

いや、もうこれは同日といってもいいよね？

そんなわけで駄文におつきあいください

第16話　理想の終わり・現実の始まり

それは長沙城内の一室。

部屋の前には多くの將兵がたむろしていた。

その表情は一樣に切迫し、憔悴しきっていた。そんな集団の中に孫呉の重鎮が一人、焰の姿もあつた。

「…江」

呟くのは愛しいわが子の名前。

数日前、遠征に出た桃蓮たちから早馬がやってきた。そしてそのもたらされた情報はあまりに残酷で、焰には受け入れがたいものだった。

『劉表の奇襲により孫堅様は右足の自由を奪われ、黄祖の裏切りにより朱才様は腹部を貫かれ重体』

そのあと軍の仔細について色々述べていたのだが、もはやその言葉が焰の耳に届くことはなかった。焰はすぐに軍を編成し、敗走した味方を救援するための兵を派遣し、自らは天下の名医として名高い華佗を招き、桃蓮・江、両者の治療に備えた。そして現在に至る。

桃蓮は敵の矢により右腰部を負傷した。その結果、どうやら筋が断

裂したらしく、右足の自由が失われてしまった。最早前線でその武威を振るう桃蓮の姿は二度と拝めまい。

華佗は顔を伏せると、そう説明した。

なお、今は桃蓮よりも更に状態の酷い江に施術を行っている。

「終わったぞ」

それから幾ばくかして、部屋の中から華佗は出てきた。

部屋の前で待機していた者たちは一斉に詰め寄ろうとする。

「待ちなさい」

しかし焔の言葉がその行為を制する。

焔はゆっくりと華佗に歩み寄ると、表情を引き締め、そして問うた。

「…どう？」

短い言葉でも、その真意が分からぬ者はこの場には皆無だった。

表情とは裏腹に、蚊の鳴くような声を出す焔を見て、周囲の者は悲痛な面持ちになる。焔が誰よりも江に溺愛し、愛情を注ぎ続けてきたことは、孫呉の誰もが知っていること。そう考えると、今の焔の胸中は推し量れぬものに他ならなかった。

「…気休めを言ったところで…仕方がないな。はっきり言おう。非常に厳しい」

「……………」

「とはいえ、応急の手当てがよかった。甘寧、と言ったか。あの娘には感謝したほうがいい。もしあの娘がいなかったら、わずかな望みすら潰えていた」

「……………そ、そう」

「……………これから二、三日高熱が続くだろう。もし五日過ぎても高熱が引かないようであれば、助かる見込みはない」

華佗によれば、高熱とは人体が、体外からの異物を追い出そう、もしくは殺そうとするために発するものであり、その熱を維持するためには存外体力を消費する。

では腹を貫かれ、弱り切っている江が数日間も熱を出し続けていたらどうなるか。その先は言わなくても想像に難くないだろう。

「とにかく、出来る限りのことはした。あとは…本人の強さ次第だ」

「…華佗、礼を言っわ。報酬は既に用意してある」

「戴くわけにはいかない。出来る限りのことはしたが、そもそも出来ることなどほとんどなかったんだ…」

そう言々と華佗はその場を辞した。

歩き去る後ろ姿は小さく、酷く弱々しいものだった。

彼がその場を去った後、焰は我が子が眠る部屋の中へと入り、ゆっくりと戸を閉めた。

「この莫迦息子は…」

目尻に雫を湛え、焰は愛おしげに眼を覚まさぬ江の髪を梳く。

本来励まさなくてはいけないはずの焰も、何故か今口から付いて出るのは我が子を叱咤するものばかりであった。

「…あなたは どうして、そう何でも一人で抱え込むの？そんなに私が、私たちが頼りにならないのかしら？」

彼にかけられた毛布が強く握りしめられる。

「貴方がいなくなったら、私は姉様に何て言えばいいのよ… 私たちはどうすればいいの…」

毛布を数滴の雫が叩く。

母子二人だけの部屋。

答えが返ってくることはないと分かっているながらも、母は子に対して疑問を投げかけ、涙することしかできなかった。

「すまなかった」

―長沙城・玉座の間―

帰還してから一月。そこには疲弊した面持ちの将兵らと、そして彼らの君主である桃蓮がいた。当然その場には江はいない。

皆を集め、前に立った桃蓮は開口一番謝罪の言葉を口にした。

「…私の油断だった。その結果多くの優秀な部下を失い、更には柱石すらも失おうとしている」

将兵らの脳裏には傷ついた江の姿がよぎる。

本来君主が頭を下げることなど、全力で制止するところなのだが、いかんせん衝撃から未だ立ち直れない面々は反応もどこか虚ろであった。

「それは過ぎたことよ。いつまでも悔やんでいても仕方がないわ」

そんな陰鬱な雰囲気が漂う中、凜とした声が場に響く。

声の主は諸将の前へと躍り出る。

「重要なのはこれからどうするのか、でしょう？」

そう言つて笑みを浮かべて、桃蓮に目配せをするのは焰だった。

最も桃蓮を糾弾する権利がある焰が、そう言ったのだ。明らかに無理やりに引き出した笑みを浮かべ、赤く腫れた目蓋を白粉で誤魔化した焰が。

その姿に諸将は涙を禁じえなかった。
そして桃蓮もそれは同様だった。軍議の場はしばらくの間、場所違
いの雨が降りしきっていた。

「さて、本題に移ろう」

そう切り出す桃蓮の顔には、先ほどよりも幾分か生気が満ちていた。

「朝廷より使者が参った」

その桃蓮の言葉に周囲は表情を強張らせる。
もしか造反の心がばれたのか。

「塩の不法製造について発覚した。どうやら古狸に尻尾を掴まれて
いたようだ」

幸いなことに天下への野望に関しては発覚していないようだ。

それでも、これはれっきとした漢王朝への反抗。故に皆処分を覚悟していた。

「本来ならば軍権、そして領土も没収のところなのだが、黄巾党の討伐に尽力したことが評価されたらしい。我々は廬江へと飛ばされるだけで済む。尚、監視役には袁術が就くそうだ」

その言葉に周囲は多少なりとも安堵の息を漏らす。

領土さえあれば、再起はいくらでも図れるのだ。しかし次の桃蓮の言葉に、思わず皆が絶句してしまう。

「それともう一つ。孫文台の隠退。それが孫家を存続させる条件だ、とのことだ」

「何じゃと!?!」

絶句する中、祭が驚きの声を上げる。

桃蓮はそんな祭を見やり、そして言う。

「しかしな、祭よ。私はこうも思うのだ。孫文台は先の戦で完膚なきまでに叩き潰された。最早『死んだ』と表現しても差し支えないくらいにな。御覧の通り右足もこの様よ」

そう言つて自嘲気味に自らの右足を指す。

「ならばこれを機に、次代に道を譲るのが正しい選択ではないかと。そう思っていた矢先に朝廷からこのような書状が来たのだ」

「堅殿…」

「祭や焰には引き続き若い者たちの面倒を頼むことになる。だが私は…少し早いが一抜けさせてもらおう」

その表情に浮かぶ感情は悲哀か無念か、はたまた両方か。とにかく桃蓮の言葉に本心はあれど、それが全てではないようだ。

「孫伯符、前に出よ」

「っ…はっ！」

桃蓮の指名に雪蓮は前へと踏み出す。

そして江東の虎と相対する。それでも雪蓮は強い輝きを以て、鋭い桃蓮の眼光を跳ね返す。

「ふっ」

ふと桃蓮が笑みをこぼす。

「いい目をしている。存外私の判断も間違っではないものだったのかもな」

一瞬後には元の引き締まった表情へと戻っていた。

「『南海霸王』：これをお前に託す。これを以て仲間を護れ。民草を護れ。そのために思うがままに振るうがいい」

「はっ、孫文台様。この孫伯符、謹んでお受けいたします」

「…うむ」

諸将が雪蓮に対して臣下の礼を取っている時、一つの人影が、玉座の間の陰から離れていった。

ここに継承は終わりを告げ、新たな時代が始まるうとしていた。明るく行く末を確信していたわけではないにしても、それでも皆が

新たな希望を胸に抱いていた。新しい孫呉が誕生したのだ。
その矢先、事件は起きた。

時は雪蓮が後を継いだ日の深夜。
その報せは全てを揺るがすに足る衝撃をもたらした。

『朱才將軍、孫呉より出奔』

第16話 理想の終わり・現実の始まり（後書き）

これにて第二章終了。

少し急展開かもしれないけど、全貌は第三章で分かる…はず。

—以下次章予告—

「本当に…行くのね？」

「ええ、今までお世話になりました」

闇の中、母子は最後の言葉を交わす。

「お主が施然か。妾のために尽くすがよいぞ！」

「仰せのままに」

同じ頃、少女の下に一人の少年が訪れる。

「貴様っ！！！我らを裏切ったのか！！？」

「裏切るも何も、私が忠誠を尽くすのはただ一人」

相対する憎悪と忠義。

「妾は…もうこんな日々は嫌じゃ！」

「お嬢様…」

涙を流す少女とそれを支える従者。

「そろそろ箱入り娘には御退場願おうか」

揚州に渦巻く策謀。

― 第三章・『揚州に昇る日輪』 ―

10月中旬に連載開始。

第17話 錆びついた歯車・動き始めた物語（前書き）

久しぶりの更新。

宣言したからには守らねば、と思い執筆したもの…

うむ

短い

第17話　錆びついた齒車・動き始めた物語

【荊州動乱における報告】

今から約5年前の中平元年2月、太平道の教祖・張角が農民を煽動して起こした百万の規模にも上る大反乱・黄巾の乱に端を発して起きた、孫堅・劉表という荊州における二大勢力間の争い。

当初、荊州北端の宛城に巢食う黄巾二十万を包囲すべく、朱儁・袁術・劉表・孫堅の四勢力が集結した。しかし黄巾二十万に対して討伐軍が三十万だったとはいえ、敵勢力は籠城。

故にどこも手を出せず、膠着状態が続くと思われた。

その矢先、孫呉が敵城内にある兵糧庫、兵舎に同時に放火。慌てふためく城内に味方の軍勢を引き入れ、見事敵首領を討ち取る。

孫呉以外にも袁術・朱儁も主力の首級を挙げたが、劉表のみは何の功もあげられなかった。その翌日、意気揚々と帰還しようとする孫呉勢、その最後尾を行軍していた黄祖が突如孫堅に反旗を翻す。

それに呼応したかのように、伏せていた劉表軍が孫呉の軍勢を急襲。結果、孫呉の君主・孫堅は腰に矢を受け重傷、猛将朱才は黄祖の不意打ちを受け、未だ意識不明とのこと。しかし一部では死亡説も流れている。

他にも祖茂を始め、名だたる将が野にその屍をさらした。

戦いののち、死に体で長沙へと帰還した孫堅は、以前より秘密裏に行っていた塩の製造が公となり、朝廷より隠退の沙汰が下り、新党首として長子・孫策が立つ。

また拠点は廬江となり、今は我が袁術の監視下に置かれている。

なお荊州はほぼ全土劉表の支配下となり、孫堅が治めていた南荊州四郡にはそれぞれ新たな太守が赴任している。

了

「施然よ、どこにおるのじゃ！」

ふと自らを呼ぶ声を耳にした青年は、読んでいた書を閉じるとその声の主である少女の方へと眼を向ける。

少女は見栄えのする金色の髪に翡翠色の瞳、そして愛嬌のある笑みを浮かべて、施然と呼ばれた青年へと駆け寄る。

「いかがされましたか、袁術様」

「堅いのう。真名は既に許しているであろう？」

「申し訳ございません。真名すら持たぬ兵卒の身なれば、名門たる袁家の袁術様を真名で呼ぶなど……」

青年の余所余所しさにむう、とかわいらしく頬を膨らませる袁術。青年は恐縮しきつた表情で弁解の言葉を紡ぎだす。

「仕方がありませんよあ、美羽様。生まれが賤しく、本来なら美羽様と言葉を交わすことさえおがましいんですからあ」

そんな施然に毒を吐くのはこれまた美眼麗しい青髪の女性。こちらは袁術とは違い妙齡であり、甲斐甲斐しく袁術の世話をしているそ

の姿は、傍から見れば姉のようであった。

とげとげしい女性の物言い、袁術は心無し表情をゆがめる。

「むう、七乃。もそつと言いつものがあるのではないか？」

「善処は致しますねえ。……ところで袁術様、袁遣様がお呼びです」

今まで底意地の悪い笑みを浮かべていた張勳―七乃―は、間を取り、表情を引き締めると臣下として主に報告を申し上げた。
報告を聞いた袁術は先ほどとは違った表情のゆがめ方をする。

「…ふん、どうせまた孫呉に出向いて挑発してこい、などと申すのである？」

因みに確認しておくが、袁術が属する勢力の頂点は他でもない袁術である。

しかしその袁術の言葉からして、今彼女を呼びだしている人物は彼女以上の立場にあることが推察できる。それがすなわち何を指すのか。

「傀儡も楽ではないのう、七乃」

そこには年にそぐわない表情を浮かべる袁術の姿があった。そんな

袁術を見た張勳は、その華奢な体を抱こうとするが、それでもそれは未遂に終わる。

袁術は俯きがちに、袁遺なる人物が待つ場所へと歩いて行つた。

施然も張勳も、縮こまる小さな背中をただ悲痛な面持ちで見つめることしか出来なかった。

「…施然さん」

幼き主の背中を見えなくなるまで見続けていた張勳は同じく佇んでいた施然に語りかける。

「どうしましたか、張勳殿」

「…本当にこれでいいんですか？」

張勳の疑問の言葉には弱弱しさがにじみ出ていた。

そしてその態度に先ほどまでの毒づいていた彼女は感じ取れない。

「少なくとも、今は動くわけには参りません…袁遺殿も張勳殿が耐えていることに気が付いているのでしょうから。もし動けば…」

そこまで言つと施然は口を閉ざした。

言霊という言葉があるように、もし口に出してしまえば現実になり得る。それだけはさせまいと、彼は口を固く結んだ。

揚州・寿春を中心に、また歴史に残る出来事が起ころうとしていた。

第17話　錆びついた歯車・動き始めた物語（後書き）

とりあえず今回は導入のみ。

舞台は荊州動乱から5年経った揚州・寿春。

ほとんどの方が知っての通り袁術の支配都市です。

そして話の中心も袁術軍とそして施然という青年です。

まあ少し歴史に詳しく、またこの小説の設定を理解している人ならば簡単に分かってしまうでしょうが…

ではまた次回

第18話 糸の先 (前書き)

師走の師は僧を指すらしいけど、ぶっちゃけ先生でもいいと思う。

要は塾講師は過労死直前まで走らされるということだ。

第18話 糸の先

汝南・寿春を含めた揚州北部における袁術の評価というものは著しく低い。

要因は様々にあれど、その最たるものが民を省みぬ重税である。また彼女の配下である者たちの素行も怨みを買う一助となっている。そんな悪評高い袁術と異なり、着々とその名声、そして力を蓄えているのは皮肉にも彼女の一族である袁遺だった。

彼は度々暴政を敷く袁術に諫言を行うが、その悉くを無視され、また主意に逆らうが故に不遇を困うことになったとされる。

民はそのことから袁遺を慈悲深く、物事の分別をわきまえる賢人と評した。無論領内では袁術に代わる為政者として袁遺を望む声が大半を占めている。

しかし民は知らなかった。

自らを苦しめる悪しき存在は何なのか。

「何の用じゃ」

不満気な表情を隠そうとしない袁術はこれまた不満を募らせた声色で、目の前の初老の男性に疑問を投げつける。

対する男は至って飄々としており、不満げな主などどこ吹く風、自分の用件を伝える。

「黄巾賊は瓦解したとは申せ、いまだに領内には民を苦しめる不逞の輩が跋扈していると聞きます。為政者として、これは野放しには出来ないでしょう?」

「ではどうしろというのじゃ。今のわらわに軍権がないことは、取り上げたお主自身がよく存じておろう」

袁術は憎憎しげに顔を顰める。

いまや袁術軍にとつて、袁術の存在はただの象徴に過ぎない。ただ存在さえすればあとはどうなるうと構わないのだ。

自分の非は袁術の非。責任を転嫁出来るきわめて簡単な構図である。これは古今東西、袁術軍に限ったことではない。

しかし袁遺は違った。彼は袁術にただの象徴以上を求める。いや、ある意味では以下と言っても差し支えない。

「袁術様が軍を率いる必要などないでしょう? あなたには有能な『狗』がいるではありませんか」

袁遺の袁術を見つめる眼に嗜虐の念が宿った。

答えを直接言わず、あくまでも袁術本人に求めさせる辺り、民が揃って賛美するその慈悲深さは仮初めであることがよく分かる。

「また孫策のもとへ出向けと言うのかの？」

「さすがは聡明な袁術様だ。私なんぞ思いもつかぬことを簡単に思いつきなさる」

慇懃無礼もここに極まれり。

最早侮蔑と嗜虐しか宿さぬ袁遣の言葉に袁術は内心辟易していた。この男は自分を悪役に仕立て上げようとしているのがよく理解できるからだ。しかしまだそれを面に出すことはかなわない。袁術はつい先ほど自らの部下に言われた言葉を反芻する。

『お嬢様が辛いのはよく分かっております。それでも今は耐えなければならぬんです。今動けば向こうの思ふ壺ですから……』

自分が最も信頼する張勳の言うとおり、今は時期ではない。傀儡たる自分にもそれくらいの実力はあつた。自分の倍以上生きるこの男は自分の周りを完全に部下で固めている。事を起こせば間違いなく、今媚びへつらっている部下はいっせいに

矛を向けてくる。今は雌伏の時なのだ。
喉まで出掛かった罵声を飲み込みつつも、彼女はいつ終わるかも定かではない雌伏を甘受する。
そして今日も彼女は袁遺に都合のよい『人形』として、課せられた使命を消化すべく動くのだった。

袁術が去った後の、袁遺の私室。
そこには別の来客の姿があった。彼は人目を忍ぶように顔を布で覆い隠している。
しかし、袁術軍実質の支配者である袁遺はそんな無礼を意に介さず、その男に接する。

「ご苦労でしたな。これでようやく揚州の支配が実現する」

本来ならば高笑いの一つでもしたかったのだろうが、それを押し殺し、くぐもった笑いで済ませる袁遺。

「この度の策が成った暁には……」

「ええ、もちろんですとも。約定を違えることはないですよ」

「…………言質はとりました。くれぐれもお間違いの無きよう」

それだけ言い残すと、男は部屋を退出する。残った袁遺はその背中を見届け、しばらくするとつぶやいた。

「奴が智勇の将？聞いて呆れる。むざむざ虎を野に放つなど有り得ぬだろうに」

その声音はあくまでも他者を蔑み、見下していた。しかし、一月と経たないうちに彼のたくらみは一時的な中断を余儀なくされることとなる。

漢王朝の権威は完全に失墜し
各地の群雄が大陸の覇を競う
そのきっかけとなった出来事

『反董卓連合』結成の檄文来たり。
時代の流れは眼に見えて激しくなった。

第18話　糸の先（後書き）

短いね。

そろそろ長い文章を書きたい。

ただそれ以上に休みがほしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7648n/>

呉志英雄伝

2011年12月7日22時51分発行